- 26) 1959年チャット動乱によってダライ・ラマは印度に亡命し、中国によって改革が実施された。一方日本でも連合国占領軍による農地改革が1946年に断行され、農地からの収入を経営基盤としていた寺院は経済的破綻に陥った。偶然にもこれも15年程の間に両国で起っている。これ以後の寺院や仏教の再興を対比することも必要であろう。1978年筆者がモンゴルのウランバートル及びソ連のウラン・ウデに在るラマ教寺院を訪れたとき、仏教や寺院やラマ(特にダライ・ラマ)に対する信者の誠実な信仰心に触れて考えたことである。
- 27) S-1 p. 807f.; S-2 p. 508: Y-1 p. 236; Y-2; Y-8 p. 208.
- 28) Y-1 p. 241f.: Y-6 p. 4.; Y-9 pp. 349~352 (平松敏雄 タントラ経典)。
- 29) Y-1 p. 239f., p. 241f.; Y-8 p. 202; 田中良昭 禅宗燈史の発展 p. 120f., p. 233 (講座敦煌 8 敦煌仏典と禅 昭和55年11月); 同 敦煌禅宗文献の研究 pp. 501~513, pp. 579~591, 昭和58年2月 大東出版
- 社。 30) S-1 p. 497f.
- 附記 なお、昭和61年9月5日に仏教大学主催の日中仏教学術交流会議において、中国 仏教会理事郭元興氏の「蓮華生 (=Padma-saṃbhava) 大師的生平及其学説与 唐代真言宗的関係 (蓮華生大師の生年及びその学説と唐代真言宗の関係)」(第1回日中仏教学術交流会議発表要旨 pp. 15~27 仏教大学 1986年)と題する発表 があって、部分的には Padmasaṃbhava の九乗次第、atīśa の三士教判、空海 の十住心の対比など卑益される処もあったが、あえてここでは参考にしなかった。

Vajradhatumahamandalopayika-

Sarvavajrodaya-梵文テキストと和訳-(Ⅱ) 完

密教聖典研究会

序

本稿は前号よりの続編である。限られた紙数を大幅に超過したが、関係各位 の御好意により、残部を一括して掲載させていただいた。深く謝意を表するも のである。

本儀軌及び使用写本についての概要はすでに森口光度が紹介しているが、本写本は、本稿で扱う分では、途中14葉 (fol. 37~51) が欠落している。しかし現存する部分には、マンダラ描法、灌頂作法等重要な軌則が説かれており、当写本の校訂は斯学に多大な貢献を及ぼすであろうことは疑いない。なお、この中途欠落部分の大半は『賢劫千仏名経』、並びに『蘇婆呼童子経』等によって補うことができ、また、当写本の前半の欠落部分 (fol. 1~20) も『一切悪趣清浄儀軌』によって、その梵文を想定し得る。よって、本儀軌の全訳も近い将来試みられることであろう。

高橋尚夫,「Sarvadurgatipariśodhanatantra 仁)一梵文テキストと和訳―」『那須政隆博士米寿記念仏教思想論集』成田,1986,所収。

¹⁾ 森口光俊,「Palm Ms. Sarvavajrodakā について—belonging to National archives, C. No. tr 360」『大正大学綜合仏教研究所年報』第7号, 1985.

^{2) 『}現在賢劫千仏名経』大正蔵 14巻, No. 447, p. 376

³⁾ 森口光俊,「Subāhuparipṛcchāgāthā について」『智山学報』第35輯, 1986.

⁴⁾ T. Skorupski, "The Sarvadurgatipariśodhara Tantna, Elimination of All Evil Destinies", Delhi, 1983.

(15)

本研究会の構成員は以下の如くである。

指 導: 斎藤光純専任講師

研究参加者:高橋尚夫,野口圭也,前田 崇,森口光俊,矢板秀臣,ルディー・スメット

テキスト校訂にあたって、前回同様、daṇḍaの補訂削除、不正規な saṃdhi の訂正、及び本写本の一特徴である語中のyの前のrの脱落 (e.g. kuyāt < kuryāt) の補訂は注記を省いた。

当儀軌の題名について一貫する。

当写木のコロホーンによれば当儀軌の 題名は Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikāsarvavajrodakā とあるも、Munīndrabhadra の注釈を参考にして Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikasarvavajrodaya とするのが妥当であると 考え前回の題名を表題の如く改めた。

また、吉慶の讚の部分はチベット訳における増広部分をも付加した。以下に20 整理して一覧表を提出する。

略号 Tib.: 西藏語訳 "rDo rje dbyins kyi dkyil 'khor chen po'i cho ga rdo rje thams cad 'byun ba''

D.: // 西蔵大蔵経 sDe dge 版, 東北 No. 2516.

P.: " 北京版,大谷 No. 3339.

H.:堀内寛仁『梵蔵漢対照初會金剛頂經の研究 梵文校訂篇 (上) (下)』高野山、1983.

Sk.: Skorupski, T. "The Sarvadurgatipariśodhana Tantra" Delhi, 1983.

Sp.: Speyer, T.S., "Ein altjavanischer mahäyänistischer Katechismus", ZDMG, LXVII-2.

現行の吉慶讚は梵讃 3 首・漢讃 4 首(内 3 首一致)にすぎないが、以下に挙 げる諸資料に同系のものが計24首見出だされる。各資料における登場順に番号 を附し、本稿p.(64)~(70)における偈番号と対応させれば下表の如くになる。

		料		└稿偈番·	· -	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19					
I	チー	\' y }	. 訳:	下 慶讃		1	2	3	5	6	7	8	9	4	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19					
I	"V	ajrod	laya	"梵文写	本	1	2	3	4	5		1	6	7	8		9		10	11									
m	『大	日経	疏』	所引		1	2	3	4	6		5	7			8	9		10	11									
IV	弘治	大郎	T並P	日仁請来					1		2							3			5				4	6	7	8	9
γ	吉	慶	梵	需					1		2							3											
VI	吉	慶	漢	語					1		2							3							4				
		備		考		仏	法	僔	降兜	出	灌	ス	出	杏		提			転		١.	階	入涅		比丘	象	諸国	· A=3	宝
									率	胎	浴	'宫'	家	行	}	道場			法輪		1		1			調御	化 生		結

資料 I. "bKra śis kyi tshigs su bcad pa (Maṅgalagāthā)", 北京 No.449, 724, 5943.

本テキストチベット語訳, 北京 No. 3339, 54a3~55a7.

- Ⅱ. 本テキスト所依梵文写本,本稿 p. (64)~(70).
- Ⅲ. 『大日経疏』大正蔵 39卷, p. 667.
- N. 長谷宝秀編『大師御請来梵字真言集』p. 331, 東京, 1976.
- V, M. 『新義声明大典』11~18丁, 川崎, 1917.

¹⁾ Munindrabhadra の注釈(北京 No. 3352)の梵名の音写は"Vajradhātumahāmaņdalopāyika-sarvavajrodaya-nāma piṇḍārtha" である。

²⁾ 高橋尚夫: 「吉慶梵讃について」 『大正大学綜合仏教研究所年報』 創刊号, 1979, 参照

\$29 evam kṛtvā pūrvasevām mandalam ālikhet / vihārārāmagrāmanagarāṇām pūrvottaradigbhāge yatra vā manaso 'nukūlam bhavati tatra susamasnigdhasuplavasupramāṇābhūṣare bhūbhāge rājño hastaśatam pañcāśaddhastam vā / sāmantamahāsāmantānām pañcāśatpañcaviṃśatihastam vā / (29a)śreṣṭhinaḥ sārthavāhasya vā pañcavimsatim tadardham vā / sādhakānām dvādasahastam saddhastam vā / tatrādau tāvad abhimatamandalabhūmimadhye mānusāsthicūrnaho x x x visasahitena mandalavighnam nivāryātmasisyabhūpālādiśāntikahomam kuryāt /

\$30 tato bhūmiṃ śodhāpayet / vyāmamātraṃ kaṇṭhanābhijānumātram vādhahkhanitvā sugandhātyaktamrdāpūrya vajrasikharaparijaptagandhodakenāsicyāsicyākotayet / susamam kūṭāgārāntargatam catustoraņaśobhitam / caturdvārākṣavāṭaparivṛtam paryantasucitritam / saghantāvasaktasatketuvitānavitanottamam / buddharatnādipattapratimābhir upasobhitam / catuskonāvasthitadhūpaghatikam / puspadīpavastrādibhiś copaśobhya gandhenopalipya vajrayakṣaparijaptagandhodakena prokṣya bhūmau hastam dattvā / vajrasattvam śatāksaram ca saptaśa āvartayed iti /

bhūmisamśodhanaparigrahavidhih //

§31 tatah svayam snātah sugandhāngo yathāptyābharanāmbarah / suraktavastrasamvītah (29b) sragvī surabhitānanah suklāstamīm ārabhya daśamīm trayodaśīm caturdaśīm vārabhya pañcadaśīm yā-

29. 擇地

かくの如く親近をなして、マンダラを描くべし。精舎、園林、村、町の東 北の方角に、或はどこでも意に適った所、そこをよく平らにし、なめらかで、 ほどよい傾斜で、適量にし、塩分を取り除く。(その)地面において、 王に は百肘か五十肘、臣下や大臣達には五十肘か二十五肘、長者や商主には二十 五(肘)かその半分、成就者達には十二肘か六肘(の大きさの 増を 築くべ し)。そこにおいて、先ずはじめに所願のマンダラの地の中央において、人 骨の粉と血と毒とを混ぜ合わせたものによって、マンダラの障碍を対治して、 (阿闍梨) 自身と弟子と地神等の息災護摩をなすべし。

30. 浄地

次に、地を清浄にすべし。一肘量ほどで、首或は脐或は膝の深さまで下に 堀って、妙香を撒じた土で満たし、金剛頂の(呪で)呪した香水を振り掛け 振り掛け、敲くべし。(そのマンダラは)全く平らで、 楼閣を中にし、 四塔 門で飾られ、四門と窓で囲まれ、框でふちどられている。鈴の懸けられた幢 幡や天蓋が広高と (揚げられ), 仏宝等の掛軸や形像によって飾られ, 四隅 には香炉が置かれている。(そのマンダラを) 花や燈や錦等で荘厳し、塗香を 塗り、金剛薬叉の(呪で)呪した香水で酒浄し、地に手を置いて、金剛薩埵 百字(真言)を七度唱うべし。

以上が浄地護念の儀軌である

31. 作檀

次に、自ら沐浴をなし、妙香を身体に塗り、あるだけの飾りと着物をつけ、 緋の衣をつけ、花鬘をつけ、顔に香料をぬり、白月の八日より始めて、或は 十日より、或は十三日より、或は十四日より始めて、十五日までにマンダラ

¹⁾ Ms. °mā° 2) Ms. yantra 3) Ms. °nai° 4) Ms. °tirha° 5) Ms. damaged, Tib. mi rus kyi bye ma khrag dan dug dan bcas pa dan mnon spyod kyi sbyin sreg gi cho ga'i dkyil 'khor gyi 6) Ms. om. m 7) Ms. °mantram 8) Ms. °ja° 9) Ms. °rā° 10) Ms. °ndo° 11) Ms. °mām 12) Ms. °tān 13) Ms. °tuko° 14) Ms. °ttikām 15) Ms. °ścasvopa° 16) Ms. °yarakşa,° Tib. rdo rje gnod sbyin 17) Ms. °damgo, Tib. lus dris byugs la 18) Ms. °mpi°

¹⁾ Tib. によれば、「人骨の(粉)と血と斑とを混ぜあわせた調伏護摩の儀軌マンダラ」。

²⁾ 金剛杵とも考えられるが不明。或は浄地の真言 "rajo 'pagatāḥ sarvadharmāḥ"

³⁾ Tib. bla res (D. re'i) mchod pa sna tshogs bres pa [天蓋の諸供発を広げ] とある。

⁴⁾ H. §307

van maṇḍalakarma kuryāt / prakṛtisthabhūbhāge tu saṃmārjya

""
lepanaṃ kṛtvā tathaiva hastenālabhya vajrasattvam āvartayet //

\$32 tataḥ sarvaṃ vidhiṃ kuryāt / paurṇamāsyāṃ vā pūrvāhnam ārabhya kuryād iti / maṇḍalapraveśadivase tv anāhāreṇācāryeṇa śiṣyasahitena bhavitavyam / tatra tāvat mahāmaṇḍalabhūmimadhye sthitvātmarakṣāṃ vighnaghātādikaṃ ca kuryāt / tato vajracakreṇa maṇḍalaṃ nirmāya praṇāmādikapūrvakaṃ saṃvaragrahaṇaṃ mahāyogaṃ kūṭāgāram āsanāni ca niṣpādya sattvaparyaṅkaniṣaṇṇa ātmānaṃ karṣayet /

adya me saphalam janma saphalam jīvitam ca me / samaḥ samayabuddhānām bhavitāhe na saṃśayaḥ // 1 // avaivartyo bhaviṣyāmi bodhisattvaikacetanaḥ / tathāgatakulotpattir mamādya syān na saṃśayaḥ // 2 // agro me divaso hy adya yajño me 'dya niruttaraḥ / saṃnipāto 'dya me hy agraḥ sarvabuddhanimantraṇāt // 3 // iti //

§33 tataḥ sarvāṅgena praṇamya dhūpabhaṇḍikāhastaḥ sarvabuddhān nimantra(30a)yet /

samanvāharantu mām buddhā aśeṣadikṣu saṃsthitāḥ /
amuko nāmāhaṃ vajrī maṇḍalaṃ kalpayāmy aham /
āyāntu sarvabuddhādyāḥ siddhim enāṃ pradāsyantu // 1 //
ity uktvā / ādiyogaṃ maṇḍalarājāgrīṃ karmarājāgrīṃ ca vibhāvya

を造るべし。本地の部分を掃除し、地ならしをし、(前と)同様に手で触れて、 金剛薩埵の(呪)を唱らべし。

32. 自身引導

次に、一切の儀軌をなすべし。十五日の朝より始めるべし。マンダラに入る日は、師資共に断食すべし。そこで先ず、大マンダラの地の中央に住して、護身と除障をなすべし。次に、金剛輪で(外)輪を化作し、(四)礼等を始めとし、禁戒の摂持と大瑜伽を(為し)、楼閣と諸の座をしつらえて、薩埵跏座にて坐し、自身を引導すべし。

- (1) 今日の吾が生は実りあるものなり、また吾が生涯も実りあるものなり、 吾れは三昧耶なる諸仏と平等とならん、そは疑いなし。
- (2) 吾れは不退転にして、菩薩と一心とならん。吾れは今日、如来の(一)族に生じるであろう。そは疑いなし。
- (3) 実に今日は、吾が最上の日なり。今日の吾が供**様**は無上なり。一切諸仏 の召請により、今日の吾が集会は最上なり。

33. 勧請

次に、全身にて頂礼して、香炉を手に把り、一切諸仏を召請すべし。

(1) あらゆる方向に安住せる諸仏よ、吾れを護念し給え。吾れは持金剛某甲なり。吾れはマンダラを描く、一切諸仏達よ、来臨し給え、その悉地を授け給え。

と言って、初行とマンダラ最勝王と羯磨最勝王(の三摩地を)修して,

¹⁾ Ms. °jyepalepa° 2) Ms. om. bhya, Tib. brtsams te 3) Ms. tantra

⁴⁾ Ms. °cakrayo, Tib. 'khor los 5) Ms. mayogam, Tib. rnal 'byor chen po

⁶⁾ Ms. om. gā 7) Ms. adds "satva mahāsamudrayā vyavasthita," Tib. den dus bdag tshe 'bras bu yod 8) Ms. "nmā 9) Ms. "tāham 10) Ms. damaged, Tib. sans rgyas thams cad spyan dran bar bya'o // 11) Ms. "ṣā" 12) Ms. damaged, Tib. stsal du gsol źes brjod la/

¹⁾ Prajňopāyaviniścayasiddhi Ⅲ-30 (髙橋 「Prajňopāyaviniścryasiddhi—和訳— (一)」『豊山学報』25号,1980)参照。

(21)

punar dvārodghāṭanapūrvakam vajrasattvasthāne śrīvajrasattvamahāmudrayā vyavasthitas tanmantrodīraņatatparo yogī sarvottarasādhakais tathāgatāhamkārayuktair nāmāstasatena mahāmandalālikhanāyādhyeşanīyah //

§34 tata utthāya sarvatathāgatapādavandanam krtvā sarvatathāgatair gagaņam āpūrayad dṛṣṭvā /

aham eva svayam vajrī vajrasattva aham svayam / aham buddho mahārājā aham vajrī mahābalaḥ // 1 // aham yogīśvaro rājā vajrapāņir aham drdhah / aham svāmī mahāvajra adhisthānād na riñcati // 2 //

§35 tato

@ vajradrsti mat //

iti cakşuşor vinyasya ahkāreņa pādatalayor viśvavajram nirmāya svasamayamudrām baddhvā yayākāśe tanmandalam utthāpya /

4 vairasattva uttistha

iti //

\$36 tatas tayā svasamayamudrayātmānam sakrd adhisthāya / punar mahāmudrām baddhvā / tathaivotthāya mudrāsthah (30b) sarvato vyavalokayan parikrameta sagarvena vajrasattvety udaharan / vajradrstya diksimamandalabandhaprakarapanjaram padatalaparigrahena bhūmitalam upādāya sumerupṛṣṭham yāvad vajramayam kurvan / punar vighnaghātādikam kṛtvā guhyarūpam maṇḍalam ākarşayed anena mudrāyuktena /

さらに、先に開門を(なして)、金剛薩埵の位置に、吉祥金剛薩埵の大印(を 結ん)で安住し、そのマントラを唱えることに専念せる瑜伽者は、如来の自 覚を持った一切の助法者と共に、大マンダラを描かんがために、百八名(讃) によって(韶尊を)勧請すべし。

34. 虚空マンダラ

次に、立座して、一切如来の御足に頂礼して、虚空が一切の如来達に満ち 満ちて行くを見て,

- (1) 吾れこそはまさに自ら持金剛なり、吾れはまさに自ら金剛薩埵なり。吾 れは仏にして大王なり。吾れは持金剛、大力者なり。
- (2) 吾れは瑜伽自在王なり。吾れは堅固なる金剛手なり。吾れは大金剛主な り。加持を離れず。

35. 金剛眼

次に,

④ 金剛眼よ マット

と(唱えてマタの二字を)両眼に置いて、アハ字をもって、両足の裏に羯磨 金剛杵を化作し、本尊の三昧耶印を結び、その(印)をもってこのマンダラ を虚空に立たしめ、

④ 金剛薩埵よ 立て

と(唱うべし)。

36. 金剛輪印

次に、この本尊の三昧耶印によって自身を一度び加持し、再び大印を結ん で、そのまま立ち上がり、(大)印に安住して、あまねく見渡しつつ、『金剛 薩埵よ』と唱えつつ、 そのつもりで続るべし。 金剛眼をもって、(四) 方と 境界と輪形と壁と網を,足裹捉え,地表から始めてスメール山の頂に至るま で、金剛杵所成となしつつ、再び障碍の破壊等をなして、秘密形のマンダラ を次の印と (マントラ) により鉤召すべし。

¹⁾ Ms. tamantro° 2) Ms. °ya drstā 3) Ms. °sthānā, Tib. byin gyis brlabs par (D. pa) 4) Ms. °ddho, Tib. bcińs te 5) Ms. vajrasattva vajrotistheti, Tib. ha dzra sa twa u tti stha (D. stha) 6) Ms. om. sa 7) Ms. "tvam uda" 8) °dṛṣṭvā, Tib. rdo rje lta bas 9) Ms. cārasātalam upā°, Tib. sa gźi (P. bźi) nas 10) Ms. °vam

^{1) 『}略出念誦経』大正蔵 Vol. 18, 226b 参照, H. §370①

²⁾ Tib. P. sa bźi → D. sa gźi により、bhūmitalam とした。

om vajramaņḍala hūm jaḥ //
iti / vajramuṣṭidvaye tarjanyaṅguṣṭhavajrā sarvamaṇḍalākarṣaṇī

vajracakrā nāma mudrā /

om mahāvajracakrādhitiṣṭha sidhya hūm //
ity anayā manḍalam punar adhitiṣṭhet / vajrahetukarmamudraivāsyā mudrā //

§37 tataḥ khadiravajrakīlakāḥ maṇḍalakoṇe catuṣṭaye vajreṇākoṭyāḥ /

- 4 om vajrakīla kīlaya sarvavighnam bandha hūm phaṭ //
 ity anena hṛdayenāṣṭottaraśatam parijapya / vāmavajramuṣṭyā vā
 pañcasūcikam vajram ādāya tena hūmkāram udīrayan maṇḍalakone catuṣṭaye maṇḍalanābhau ca kīlakapañcakam niṣpādya / dakṣinakareṇa trisūcikavajrīkṛtenākoṭayed imam udīrayan /
- om gha gha ghātaya ghātaya sarvaduṣṭān phaṭ //
 kilaya kilaya sarvapāpān phaṭ //
 vajrakilavajradhara ājñāpayati svāhā //
 iti //

§38 (31a) tato vajrayakṣaparijaptaprokṣaṇakalaśaṃ maṇḍalagrhadvāre nyasya vajramuṣṭikarmamudrayā sarvarakṣāṃ dṛḍhīkṛtya ca vajrakavacena kavacayet / tathā ca āha /

② オーン 金剛マンダラよ フーン ジャハ 1) と。二手金剛拳になし、頭指と大指の金剛(印)は、一切のマンダラを鉤召する(印)であり、金剛輪印と名づく。

④ オーン 大金剛輪よ 加持せよ 成就せよ フーンと (唱え), この(印)によって再びマンダラを加持すべし。(なお,) この印は金剛因 (菩薩) の羯磨印に他ならない。

37. 金剛橛

次に、カディラ (の木で作った) 金剛橛をマンダラの四隅に金剛杵で打ち込むべし。

⑩ オーン 金剛橛よ 橛せよ 一切の障碍を縛せ フーン パット という,この心真言にて百八度び誦して,左金剛拳になして,五鈷金剛杵を 把み,その(金剛杵)によって、フーン字を唱えつつ,マンダラの四隅とマンダラの中央に五本の橛を準備して,右手三鈷金剛(印)になして,打ち込むでし。次の(マントラ)を唱えつつ。

④ オーン ガ ガ 破壊せよ 破壊せよ 一切の悪しき者達を パット 概せよ 概せよ 一切の罪過を パット 金剛概と金剛杵を持つ者は教令す スヴァーハー

と。

38. 被鎧

次に、金剛薬叉の(呪にて)誦された聖水(を入れた)瓶をマンダラの戸口に置いて、金剛拳羯磨印によって、一切の守護を堅固にし、金剛甲冑(の印)によって被鎧すべし。また、同様に

¹⁾ Ms. °jra 2) Ms. °jrā° 3) Ms., Tib. °kra adhi° 4) Ms. °ghnām

⁵⁾ Ms. "yecāstotara" 6) Ms. om. m 7) Ms. "japtā i, Tib. bzlas la

⁸⁾ Ms. °yam 9) Ms. °lam 10) Ms. °ştayam 11) Ms. iyam 12) Ms. udiyan

¹³⁾ Ms. ghāta, Tib. ghā ta ya 14) Ms. duṣṭā, Tib. du ṣṭān (P. du ṣṭaṃ)

¹⁵⁾ Ms. °pāpa, Tib. pā pam 16) Ms., Tib. °ro 17) Ms., Tib. D. om. ā

¹⁸⁾ Ms. damaged, Tib. swā hā 19) Ms. °drāyā 20) Ms. vajravajrakavarana, Tib. rdo rje go chas

^{1) 「}小指」とならば小金剛輪の印となり趣意に合う。『瑜祗経』(大正蔵 18 巻, 259 b) 参照。

²⁾ H. §1265

(25)

bandhayogavidhānam ca vajramuştim prakalpayet /
kavacayed vajrakavacarakṣām sarvam tu maṇḍale // 1 //
iti //

§39 punar maṇḍalamadhye niṣadya manasā sarvamaṇḍalaṃ parikalpya sarvamaṇḍalasthānaṃ gandhenopalipya / pañcatathāgatasthāneṣu caturaśrāṇi candanakuṅkumādibhir maṇḍalakāni kuryāt / śeṣu vartulāni / svamantraiś ca saptavāraparijaptāni //

\$40 tato vajrānkuśādibhir ākṛṣya praveśya baddhvā vaśīkṛṭyākāśadeśāt teṣu tathāgatādiṃ svahṛdaye niveśya pañcabhir upacāraiḥ
saṃpūjyābhiṣekāya kalaśaṃ sarvavrīhyādisaṃyutaṃ stokaṃ toyasya
prakṣipya vajrasattvābhimantritam adhivāsayed vidhivad dattvārghaṃ gandhavāriṇā / kusumāni ca prakṣipya dhūpenaivādhivāsayet / anyasmin tv ahani trisaṃdhyāntaṃ samyak parijapet / tenābhiṣekaṃ kurvīta punarjaptena maṇḍale / lakṣaṇaṃ vakṣyamānaṃ ca tasya jñeyaṃ mahātmabhiḥ / śrīvajrasattvasya purataś
cāyaṃ sthāpyaḥ / tato va(31b)jrayakṣavajrasattvabuddhalocanābhiḥ
pratyekaṃ ghṛtādikam aṣṭottaraśataṃ juhuyāt /

ity adhivāsanahomavidhih // //

7) Ms. °dayair, Tib. ran gi sñin gar 8) Ms. °jyā abhi° 9) Ms. °smi

(1) さらに縛の規則を行じて金剛拳を設定すべし、金剛甲冑による守護をあまねくマンダラに鎧すべし。

と(説かれている)。

39. マンダラ意想

また、マンダラの中央に坐して、意をもってマンダラ全体を想起し、マンダラ中のすべての座位を塗香によって塗り、五如来の座位においては、栴檀やサフラン等(の香油)で(塗って)、四角の結界をなすべし。残りの(諸尊の座位)においては丸く(なすべし)。各尊のマントラを七度びずつ誦しながら。

40. マンダラ供

次に、虚空の被方より、如来達をそれらの(座位に)、金剛鉤等(の印)によって、鉤召し、引入し、縛し、自在になして、(しかるのち)、自身の心臓に入らしめて、五種の饗応によって供養して、灌頂のために、あらゆる米等の(五穀)を満たした瓶に、金剛薩埵の(呪にて)踊された水滴を注ぎ、香水にて関伽を施こし、儀軌の如く薫ずべし。また、サフランを注いで焼香にて蒸ずべし。また、翌日まで三時に正しく誦すべし。マングラにおいて再び誦したその(瓶水)によって灌頂すべし。

また、(後に)説かれるであろうその(瓶の)様相を勝れた(弟子)達は知るべし。また、それを吉祥金剛薩埵の面前に置くべし。

次に、金剛薬叉や金剛薩埵や仏眼等の(呪)によって、各々蘇油等を百八 4) 度び焼施すべし。

以上が藁習の護摩の儀軌である。

¹⁾ Ms. damaged, Tib. bciń ba'i cho ga sbyor ba la 2) Ms. om. m 3) Ms. °yeta 4) Ms. om. r 5) Ms. vaṃtu° 6) Ms. om. sya, Tib. dgug pa

¹⁰⁾ Ms. °dhya° 11) Tib. dkyil 'khor du bzlas la 12) Ms. °ksa°

¹⁾ Tib. による。山典は不詳。

²⁾ Tib. には "sarva" を欠く。

³⁾ Sk. p. 234 参照。Sk. では śloka 調の韻文となっているが、韻律が不正規であり、 また Tib. でも散文であるため、ここでは詩型にしていない。

⁴⁾ Tib. 欠。

•

\$41 tato bāhyabalim dattvopaspršya nāmāṣṭaśatena saṃstutya puṣpādibhir lāsyādibhiś ca sarvatathāgatam saṃpūjya praṇamya śiṣyān adhivāsayet / tatrādau tāvat susnānaśucivastraih puṣpakaraiś
cācāryam praṇamya śiṣyair eva vaktavyah /

tvaṃ me śāstā mahārata /
icchāmy ahaṃ mahānātha bodhisattvanayaṃ dṛḍham //
dehi me samayaṃ tattvaṃ bodhicittaṃ ca dehi me // 1 //
buddhaṃ dharmaṃ ca saṃghaṃ ca dehi me śaraṇaṃ trayam /
praveśayasva māṃ nātha mahāmokṣapuraṃ varam // 2 //
iti //

\$42 tataḥ pāpadeśanādikaṃ kārayet /
śṛṇu bhadrāśayanibhṛta samyak saṃhṛtya kalpanāḥ sakalāḥ /
visṛtamatir no sugatair adhiṣṭhyate vajṛasattvādyaiḥ / (1)
kṛtam anumoditam akuśalam avaśena kāritaṃ yac ca /
tat sarvam agrabodheḥ purataḥ pratideśayāmy adhunā / (2)
saṃbhāradvayam aniśaṃ sugatasutānām agādhaṃ gambhīram /
sakalajagadarthasādhakam anumode 'haṃ tato 'nyad api / (3)
kṛpayā parīttamānasamānaghamatiṃ sakalakāyahatamoham /
sugataṃ prayāmi (32a) śaraṇaṃ sakalakulāṃbhojamadhyagatam /(4)
pravaradhiyām ārāmaṃ hīnabhayaṃkaratayā ca jetṛvanam /
dharmaṃ gato 'smi śaraṇaṃ bhayavibhavavibhāvanācaturam / (5)

41. 弟子祈願

次に、外的な供物を捧げ、沐浴し、百八名(讃)にて称讃し、花等や舞踊等によって一切如来を供養し敬礼して、弟子達を滅ずべし。そこにおいて先ず、良く洗濯した清らかな衣服を着、手に花を持ったその弟子達は阿闍梨に敬礼して、(次のように)言うべし。

- (1) 汝は吾が師なり、大喜あるものよ、吾れは堅固なる菩薩の理趣を楽欲す。 大導師よ。吾れに三昧耶たる真実を授けよ、また、吾れに菩提心を授けた まえ。
- (2) 仏法僧の三帰依を吾れに授けたまえ、導師よ、吾れを勝れた大解脱の城に入らしめたまえ。

と。

42. 発露懺悔等

次に、谶悔等をなさしむべし。

- 1. 賢善なる意楽で満ちたる者よ、あらゆる判断を正しくめぐらして聞くがよい。心散乱せる者は善逝や金剛薩埵等によって加持せられず。
- 2. 非力なる(吾れ)によって不善が惹き起され、(また、不善なるものに) 随喜がなされたが、それら一切を最勝なる菩提を具えた方の面前で今まさ に吾れは懺悔したてまつる。
- 3. 測り難くして甚深なる、善逝の子 (善薩) 達の二資糧、(すなわち)、あ らゆる世間の利益を成就せしむるものに、常に吾れは随喜す。またそれよ り他のものにも随喜す。
- 4. (その大) 悲により、慢を捨て、正しき過失なき慧を持ち、愚痴を全身にて打ち砕き、すべての部族の運華の中央にいらっしゃる善逝に吾れは帰依したてまつる。
- 5. 勝れた智者達には歓喜園(の如き),(智慧)劣れるがゆえに恐れを持て2) る者には祇園(の如き),(生死の)恐れを離れる観想に巧みなる法に吾れは帰依したてまつる。

¹⁾ Ms. om. °r 2) Ms. °tam 3) Ms. om. m 4) Ms. °jā° 5) Tib. srid pa'i 'byor pa zil gis gnon pa'i mchog

¹⁾ Tib. phyi rol tu(D.du)「外で」 2) Tib. dam pas 'jigs pa rnams kyi による。

rāgādyuragavisāpaham urukarunāmānasam vibuddhadhiyam / vītabhavam vanditam aham pravāmi saranam vatīsaganam / (6) hetusamanantarādhipavisayātmaphalaprabhāvajitasatrum / pratividhya kṛpāmūlam bodhau samvedanam bibharmy asamam /(7) sattvānām paripākāya paritrānāya vā punah / svacetaḥśuddhaye caitat sarvam dadyāt tṛṇādivat // 1 // evam śilam kṣamām viryam dhyānam prajñām anuttarām / bhāvayeyam viśuddhyarthī svapareṣām pratikṣaṇam // 2 // saugatamantraviviktam satatam anābhogavāhisamājam / prāpayitum etesām jagatām sthito 'ham adhunā vidiveha // 3 // (i) anena caivam samudānītena kuśalamūlena sarvasvaparityāginā mayā bhavitavyam / (ii) sarvasattvānām antike samacittatā ma(32b)yotpādayitavyā / (iii) sarvasattvā mayā sarvayānaih sarvopāyavisarair vinīyā apratisthite nirvāņadhātau pratisthāpavitavyāḥ / (iv) sarvasattvān api ca parinirvāpya na kaścit sattvaḥ parinirvāpito bhavatīty evam mayā cittam utpādayitavyam / (v) anutpādatā mayā sarvadharmāṇām avaboddhavyā / (vi) avyavakīrņena ca sarvajñatājñānacittena satsu pāramitāsu mayā śiksitavyam / (vii) ekayānanayanirhāro mayāvaboddhavyah / (viii) saptatrimśadbodhipakṣyadharmanirhārapratibodhāya mayā śikṣitavyah (ix) daśabalavaiśāradyapratisamvidāveņikabuddhadharmapratibodhāya mayābhiyogah kartavyah / (x) evam yāvad aparimitasaka-

labuddhadharmanirhārāya mayā pratipattavyam //

- 6. 貪等の蛇の毒を防禦し、広大な悲の心を持ち、非常に賢い智を持ち、有 を離れ、欲望を制御せる衆会に吾れは頂礼し、帰依したてまつる。
- 7. 因のすぐあとに増上する境を自体とする果の力によって(煩悩の)敵を 滅ぼせる, 悲を根(とせるお方)に表敬し, 菩提に対する無等なる認識を 吾れは持す。
- (1) 有情達の教化のために、或は救護のために、さらには自身の心の浄化のために、すべてのものを雑草(を捨てる)如く施与すべし。
- (2) かくの如く、持戒と忍辱と精進と禅定と無上の智慧を自他の清浄を求める吾れは間断なく修するであろう。
- (3) 善逝のマントラの知識により、常に無功用なる法王を、この世の人々が 1) 得るように、今こそ吾れは勝処に立たん。
- (i) また、かくの如く積集された善根を持つこの吾れは全財産を捨てるであろう。(ii) 一切の有情達に接する時、吾れは平等心を起こさすであろう。
- (iii) 一切の有情達を、吾れは、一切の方便の拡張せる一切の乗物によって、 導びき、不住処涅槃の境界に定住せしめるであろう。
- (iv) 一切の有情違を般涅槃せしめても、だれも(まだ)般涅槃させられていない、とこのように思って、吾れは発心せしめるであろう。
- (v) 一切諸法は(本来)不生であると吾れは覚知するであろう。
- (vi) また、混りけなき一切智智の心を持って吾れは六波羅蜜を修学するであるう。(vii) 一乗の理趣の引発を吾れは覚知するであろう。
- (viii) 三十七菩提分法の引発を覚知せんがために吾れは修学するであろう。
- (ix) 十力, (四)無畏, (四)無礙, (十八)不共仏法を覚知せんがために吾れは努力するであろう。
- (x) かくの如く数え切れないあらゆる仏法の引発のために吾れは修行する であろう。

¹⁾ Ms. damaged, Tib. 'dod chags la sogs sprul gyi dug bcom ma źiń / 2) Ms. °śā° 3) Ms. om. m 4) Ms. °ddhya 5) Ms. svare° 6) Ms. eśa jatām, Tib. 'gro ba 'di yis 7) Ms. °ni° 8) Ms. māyo°, Tib. bdag gis 9) Ms. om. r 10) Ms. °yā/prati°, Tib. mi gnas pa'i 11) Ms. °dato, Tib. skye ba med pa ñid du 12) Ms. °rmmaṇām 13) Ms. °vyāḥ 14) Ms. °jñā° 1) Ms. °nihārra° 16) Ms. °rmmā° 17) Ms. °partta°

¹⁾ Skt. は難解のため Tib. bde bar gśegs pa'i snags la mkhas pa yis // chos rgyal rtag tu lhun gyis grub pa ni // 'gro ba 'di yis thob par bya ba'i phyir // khyad 'phags gnas la bdag ni gnas par bgyi // を参照。

§43 ayam asau bodhisattvānām vajropamo mahābodhicittotpādaḥ sarvatathāgatapitā / sarvatathāgatājnākāraḥ sarvatathāgatajyeṣṭaputro 'yam asau bhagavān (33a) samantabhadraḥ / tadyathā sampāditakuśalamūlabalinā mayā tu cittotpāde vyavasthitenānantamukhanirhārasya samantabhadracaryābhidhānasyāpi vyavasthite prāntanifi ṣpādane nikhilavineyajanarāśim bahumukhaiś caryāprabhedasamdarśanair āvarjya sampraharṣya samuttejya niyojanīya iti // //

§44 tatah sisyahrdaye

(6) samaya aḥ /

iti paṭhañ candramaṇḍalaṃ nirmāya tasyopari pañcasūcikaṃ vajram asya pratiṣṭhāpya hṛdaye hṛdayena tu /

Tii / surate samayas tvam hoḥ vajra siddhya yathāsukham //
iti / śirasi ca gandhodakapariplutam karam nyasya vajrasattvam

12) 7) 13)
āvartayan vajram cintayet / lalāṭe candrasyopari trāmkārena vajraratnam / kanṭhe hrīḥkārena vajrapadmam / mūrdhni kamkārena viśvavajram /

wajrasattva vajraratna vajradharma vajrakarma //

···15)

ity uccārayet / svahṛdayādiṣv adhitiṣṭhet //

§45 (33b) tato vajragandhayā teṣām kareṣu gandham dadyāt / puṣ
18)
payā puṣpāṇi / dhūpayā tān dhūpayet / dīpayā dīpenābhāsayet /

43. 発菩提心

これこそが菩薩達の金剛にも喻うべき大菩提心の生起であり、(それはまた)一切如来の父である。これこそが一切如来の教令を実行する一切如来の長子であり、尊とき普賢である。すなわち、引き起された善根の力を持つ吾れは、発心を確立し、普賢行と名づける無辺門への引発の確立と究極の完成にさえも、一切の教化せらるべき人々を、多方面の異なった行の教えをもって、引きよせ、喜ばせ、はげまして、導びくであろう。

44. 弟子加持

次に、弟子の心臓に

値 サマヤ アハ

と唱えつつ、月輪を化作し、その 上に五鈷金剛杵を (置くと思い)、彼 (弟子) の心臓に立たしめ、(次の) 心真言をもって (誦すべし)。

⑩ 汝は妙楽に三昧耶(平等)なり ホーホ 金剛よ 随意に成就したまえと。

また、香水に濡れた手を頭頂に置いて、金剛薩埵(の呪)を唱えつつ金剛杵(が立つと)思うべし。額においては、月(輪)の上にトラーン字により金剛宝を(思うべし)。喉においては、フリーヒ字により金剛蓮華を(思うべし)。頭においては、カン字により羯磨金剛を(思うべし)。

④ 金剛薩埵よ 金剛宝よ 金剛法よ 金剛業よと、唱うべし。自分の心臓等に(彼らを)加持すべし。

45. 授与歯木

次に、金剛塗香(の印)をもって、彼ら(弟子達)の手に塗香を与うべし。 化(の印)をもって花を(与え)、焼香(の印)をもって彼らを薫ずべし。灯 (の印)をもって灯により照らすべし。

¹⁾ Ms. °traḥ ayam 2) Ms. °vāṃ 3) Ms. °teno° 4) Ms. °nasyāpayavasthite, Tib. sgo mtha' yas pa la gnas pa 5) Ms. damaged, Tib. mtha' med par gyur pa rdzogs par byas 6) Ms. °lā° 7) Ms. om. ṃ 8) Ms. °mute° 9) Tib. a 10) Ms. °pyam 11) Tib. ta 12) Ms. °yaṃ 13) Ms. °to 14) Ms. °ntho 15) Ms. °rmmety uccā° 16) Ms. °kāreṣu, Tib. lag par 17) Ms. °yāḥ

¹⁸⁾ Ms. tām

¹⁾ 或は『「金剛薩埵よ」と』か。

Vajradhātumahāmandalopāyika-Sarvavajrodaya

vajrahāsaparijaptam dvādaśāngulapramānam udumbaram aśvatthamayam vā gandhadigdham agre kusumanibaddham dantadhāvanam dadyāt / taiś ca prānmukhair uttaramukhair vāgreņaiva khādanīyam //

§46 vajratīkṣṇaparijaptan pratyagran kuśan dattvaivam vadet / ebhir āstāram krtvaikam sirasi dattvā sayyā kalpanīyā kalpanīyā // ···10)
iti //

§47 vajrarakṣābhijaptam tataḥ samyan nirbadhnīyād vāmapāṇau tu sūtrakam granthibhih samupetam vai tribhih svayam eva tu //

§48 tato yathāśaktyā gambhīrodāradharmadeśanayā sarvān samuttejya sampraharşya vadet / uttisthata bhadramukhāḥ śvo mahāmaṇḍalaṃ drakṣyatha // iti // adhivāsanavidhih // //

§49 tatah sūryodayakāle tathaiva tanmandalam uparyākāse nyasya sūtrayet / tatrādau tāvan nīlapītaraktaharita(34a)sitasugandhavarņakaiļ pṛthakpṛthaksūtrāṇi rañjitāny anayaiva paripāṭyāvasthāpya / 49 hūm trāh hrīh ah āh //

ity ebhih svabījair akşobhyādīn sūtreşu nyasya /

dīptadṛṣṭyāṅkuśi jaḥ //

金剛笑 (のマントラにて) 誦した十二指量のウドゥンバラ或はアシュヴァ ッタでできた、香を塗り先端に花を結んだ歯木を与えるべし。そして、東あ るいは北に顔を向けた彼ら(弟子達)に先端を咬ましむべし。

46. 夢想

金剛利(のマントラにて)誦した新しい吉祥草を与えて、以下の如く言う べし。『これらによって床を作り、一(束)を頭に当てて、よくよく眠れ』 ہ لے

47. 授与臂釧

次に、金剛護(のマントラにて)誦した三つの結び目のある臂釧を自ら正 しく左の手に繋けるべし。

48. 入壇許可

次に、深甚にして広大なる法の説示をもって、能う限り、一切の(弟子) を励まし、喜ばせて(次のように)言うべし。

『立ち上がれ,賢い者達よ,明朝,汝らは大マンダラを観るであろう』と。 以上が(入壇)許可の機軌である。

49. 墨打ち法

次に、太陽が昇った時、(前) の如く、そのマンダラを上空に布置して墨打 ちすべし。そこで、先ず始めに、青・黄・赤・緑・白の良い香りの顔科で染 めた一本一本の抨線をその順番に配置して,

フーン トラーハ フリーヒ アハ アーハ

というこれらの本尊の種子によって、阿閦等の(五如来を)拝線に布置し、

⑩ 輝ける眼によって鉤召せるものよ ジャハ (H. §370(2))

¹⁾ Ms. om, m 2) Ms. udra°, Tib. byan du 3) Ms. vā agre° 4) Ms. °kṣṇam

⁵⁾ Ms. °ptam 6) Ms. °gron 7) Ms. damvaivam 8) Ms. debhir 9) Ms. °ye

¹⁰⁾ Ms. °yeti 11) Ms. °nai 12) Ms. tisrbhih 13) Ms. °śakyā 14) Ms. °vām

¹⁵⁾ Ms. "deduti"

¹⁾ 嚼楊枝の真言 vajra hāsa (haḥ), H. §81

vajrasūtram me bhagavan prayacchatu mahāmaṇḍalasūtraṇāya //
iti //

- \$50 tatalı svabījaraśmisūtrair akşobhyādisampreşitair dīptāńkuśākṛṣţasvahastasamsthitailı tāni sūtrāṇi sampūrya /
 - anyonyānugatāḥ sarvadharmāḥ parasparānupraviṣṭāḥ sarvadharmā atyantānupraviṣṭāḥ sarvadharmā om vajrasattva hūm//
 iti codāharan valaye saṃvartya maṭakārābhyāṃ dakṣiṇetaracakṣuṣoḥ sauryacandramasau niṣpādya /
- vajradṛṣti maṭ / iti sthirīkṛtya gandhopaliptahemabhājanādau tatsūtram samsthāpya gandhapuṣpadhūpaiḥ sampūjya /

\$51 tataḥ şoḍaśasattvaiḥ punar maṇḍalabhūmi(34b)ṃ gandhenopalipya bahiḥ samantataḥ puṣpeṇopaśobhyāntarikṣāvasthitasarvakulebhyo 'rghaṃ dattvā puṣpādibhir lāsyādibhiś ca sarvāṇi saṃpūjya praṇamya jaḥkārābhyāṃ vāmetaracakṣuṣoś candrasūryau pītābhau niṣpādya gītaśabdopahāraiḥ saha maṇḍalaṃ kalpayet //

§52 tatra tāvat pūrvābhimantritam varņakena sugandhaśuklena sūtram tīmayet /

と言って、(ジャハの種子を)二眼に布置して、『世尊よ、吾れに金剛線を授け給え、大マンダラの墨打ちのために』というこの(句)を唱えつつ、すばやく動く輝ける眼とまつげをつり上げた眼光によって阿閦等の(五如来を) 驚覚すべし。

50. 抨線加持

次に, 阿閦等によって放たれた, 輝ける鉤にて鉤召せられ自分の掌にある 本尊の種子の光線によって, これらの抨線を満たして,

① 一切諸法は交互に随行せり 一切諸法はお互いに随入せり 一切諸法は完全に随入せり オーン 金剛薩埵よ フーンと唱えつつ、環になして、マとタの二字より(化作せる)太陽と月を右と左の眼に生じさせ、

と (唱えて) 堅固になして、香を塗った黄金の器等に、この抨線を安置して、 途香と花と焼香によって供養して、

③ オーン 金剛の如き三昧耶 (本誓) を持つ者よ 拝線を越ゆるなかれ フーン (H. §851)

と、金剛縛にて(抨線を)固定し、百八返誦すべし。

51. 作檀

次に、十六 (大善) 薩の (真言を唱えつつ)、再びマンダラの地を香にて塗って、外側をあまねく花で飾り、空中に位置せる一切の部族達に閼伽水を施こし、花等や舞踏等によって一切 (諸仏) を供養し、頂礼して、ジャハの二字より (化作せる) 黄色に輝く月と太陽を左右の眼に生じさせ、歌や調べの奉納と共にマンダラをしつらえるべし。

52. マンダラ抨線

そこにおいて先ず,以前に加持した抨線を良い香りの白い顔料に 浸すべ 1...

¹⁾ Ms. padrutapaccaleccakṣuḥpadmākarṣaṇalocayādrṣṭyākṣyobhyādī, Tib. rab tu g-yo źiṅ 'bar ba'i mig // mig gi rdzi ma 'dren pa ni // źes bya ba'i 'bar ba'i lta bas / mi bskyod pa la sogs pa la 2) Ms. °yaṃ 3) Ms. °vāṃta 4) Ms. om. °r 5) Ms. °ra° 6) Ms. °rmmāḥ 7) Ms. °japtet 8) Ms. °bhūmīn nandeno°, Tib. dris 9) Ms. °ghan 10) Ms. temayet, Tib. om.

¹⁾ cf. H. §367(2)

tato manasaiva vajradhātv iti vajravācoccārayan vairocanībhūya svahrdayād vajrakarmety udāharan vajrakarmarūpam uttarasādhakam nirmāya /

om vajrasamaya sūtram mātikrama hūm // iti //
§53 65 jah jah jah //

iti tribhir jaḥkārair uttarasādhakena sūtrākarṣaṇaṃ kāryam / dvārāṇi cāṣṭamabhāgikāni / dvārapramāṇā dvāraniryūhāḥ / sarvābhyantarā sarvabāhyā ca dvārārdhapramāṇā vedikā / vedikārdhapramāṇā pañcaraṅgikarajobhūmiḥ / toraṇaṃ dvāratriguṇaṃ kāryam / bāhyamaṇḍalārdhenābhyantaramaṇḍalaṃ caturaśraṃ caturdvāravedikāparivāritam / aṣṭastaṃbhayuktaṃ ca saṃsūtrya maṇḍalanābhau khadiram adha ekasūcikavajrākāram upari pañcasūcikava

次に、意にて『金剛界よ』と金剛語にて唱えつつ、毘盧遮那となると(思い)、自身の心臓より『金剛業よ』と唱えつつ、助手を金剛業の身を取る者と作し、

次にそれより『金剛薩埵よ』(と)唱えつつ、自身は金剛薩埵なりと思い、その抨線を左の金剛拳にて把み、ジャハと(唱えつつ)その金剛業の身を取った助手に押線を持たせて(マンダラに)入らしめて、一切の方角は平等なりと観じつつ、

(i)東に顔を向けて金剛線を張るべし。(ii)さらに、阿闍梨は南方に立って北に顔を向け、第二の(抨線を張るべし)。(iii)次に、東南の方角に立って、北に顔を向け、外輪の東の抨線を(張るべし)。(iv)(次に、)北西に立って南に顔を向け、西の抨線を(張るべし)。(v)その同じところ(北西)に立って北の抨線を(張るべし)。(vi) 再度、東南の方角に立って、南側の抨線を(張るべし)。また框の抨線を(張るべし)。(vii) 再度、東南の角に立ち、北西の角まで(wii)、南西に立って東北の角まで(抨線を)張るべし。また、阿闍梨と助手の行歩は 右続によって(なさるべきである)。この場合の坪線に関してのマントラは次の通り。

53. 図絵マンダラ

切 ジャハ ジャハ ジャハ

と、ジャへの字を三度び(唱えつつ)、助手は抨線の牽引をなすべし。また、門は(一辺の)八分の一であり、門の扉は門と同じ大きさである。内と外のすべての框は門の半分の大きさである。五色の塵砂(を撒く)地は框の半分の大きさである。塔門は門の三倍になすべし。内輪は外輪の半分で、四角であり、四門と框が繞っている。また八柱を抨線で結び、マンダラの中心にカディラの(極)を、下には独鈷金剛杵の形をした(橛)を、上には五鈷

¹⁾ Ms. °dhātu/iti 2) Ms. °vāccocārayam 3) Ms. °ram 4) Ms. °ttvam, Tib. sa twa źes 5) Ms. °ram 6) Ms. °renā 7) Ms. °praveşya, Tib. btan

⁸⁾ Ms. vrahmasū°, Tib. rdo rje srad bu 9) Ms. yāmyām, Tib. lhor

¹⁰⁾ Ms. °trah 11) Ms. nairite 12) Tib. om. 13) Ms. tr°

¹⁾ Tib. 音写による。

jrākāram kīlakam pūrvavad vajrakīlamantreņa parijapya vajreņāko1)
tya tadavasaktasūtreņābhyantaramaņḍalabāhyato vajramālām pra3)
dakṣiṇakrameṇaiṣānīm diśam ārabhya sūtrayet / maṇḍalapramāṇena ca dviguṇaṃ ṣaḍḍhaste pārimāṇḍalyena kanīyasā pramāṇaṃ
sūtraṃ kārya(35b)m anyatrānurūpam //

§55 saced vighnanivāraņam kartukāmo bhavati / lakṣajaptena kī-

ktacitrāgrapatākāḥ / teṣu dvāraniryūhasandhisu cārdhacandrapra-

tisthānavajraratnakarajvālā lekhyāḥ // iti //

— 269 —

金剛杵の形をした橛を、以前の如く金剛橛のマントラを誦して、金剛杵にて打ち込んで、それに抨線を引っ懸けて、内輪の外側に金剛鬘を東北方から右まわりに墨打ちすべし。マングラの大きさが二倍の時は、六肘より少なめの輪郭に抨線はなさるべきである。他も順じて(なさるべし)。

54. 抨線の相

ここに、経典の言葉によって拝線の相が説かれる。

- (2) (そのマンダラは),四角で,四門あり,四の塔門にて飾られ,四本の(檀)線で結ばれ,幡や華鬘で荘厳されている。(H. §204(5))
- (3) (四) 隅と、すべての門と櫓の合するところは金剛宝にて飾られている。 (次に) 外輪を墨打ちすべし。(H. §204(6))
- (4) その(外輪)の,輪に似た内宮に入って,金剛線にて繞らされ,八柱に $^{...3}$ て飾られた(H. $\S204(7)$)
- (5) マンダラを、賢者は墨打ちすべし。一切方は平等なりと思惟しつつ、東西北南の方角に四線を(引いて)八輪を(墨打ちすべし)。 と。

また、外と内との框には、瓔珞や半瓔珞、払子や日月輪を描くべし。マンダラの一切の隅に、風に揺れ動く、鈴のついた、色とりどりの先端を持つ幡を (描くべし)。また、それらの門と櫓の合する処に、半月に立った光炎ある金剛宝を描くべし。

55. 橛

もし、障碍を遮止せんとする者は、橛のマントラを十万回唱えることによ

¹⁾ Ms. °tyā 2) Ms. °ma° 3) Ms. diśim 4) Ms. °ma° 5) Ms. °yasī 6) Ms. sūtrenam, Tib. thig gi mtshan nid 7) Ms. numanda°, H. sumanda° 8) Ms. °pta aṣṭa° 9) Ms. sūtraprājnāḥ, Tib. śes rab can gyis thig gdab po //
10) Ms. °ham, Tib. dmigs la 11) Ms. °karo 12) Ms. °lam 13) Ms. °khyam

^{1) §37@,} H. §1265 2) 意味不詳。ひとまずこのように訳しておく。

^{3) 1} 偈から4 偈まで "Saṃpuṭodbhavatantra" Ⅲ-iv-3~6 に対応。野口:「Saṃpuṭodbhavatantra 所説の金剛薩埵マンダラ」『密教図像』 5 号, 1987 (掲載予定), 参照。

(41)

lamantreņāstottarasatābhimantritair maṇḍalanābhisthanirdistakīla-kasadṛśaiḥ kīlakaiḥ sarvavighnān kīla(36a)yed anayānupūrvyā / yathoktamaṇḍalanābhisthakīlakāvasaktasūtreṇa pradakṣiṇato bāhyamaṇḍalasya vartulaṃ prabhāmaṇḍalaṃ saṃsūtrya tasya bahiś cakravāḍaṃ tathaiva vartulaṃ saṃsūtrayet /

tatra prabhāmaṇḍale valmīkamṛttikayā devādivighnapratikṛtiṃ kṛtvā / śakrapratikṛtau svadiksthityām ikāreṇa śakraṃ pītam / evam agnyādipratikṛtau raṃkāreṇa raktam agnim / aham iti yamaṃ kṛṣṇam / kram iti rākṣasaṃ kṛṣṇam / vam iti varuṇaṃ śu-klam / yam iti vāyuṃ dhūmram / phaṭ iti kuveraṃ pītam / sumbhetiśānaṃ śuklaṃ niṣpādya / vajrāṅkuśādibhir ākṛṣya praveśya baddhvā vaśīkṛtya kīlayet /

hūm vam hūm / (8... ...8)
ityādivivardhanayogāt pratyālīḍhapādāvasthito 'ntarāntarā ca meghādyabhimukhīm tām mudrām kṣipet / gaganodāraspharaṇadīptajvālākulaprabheṇa (36b) vajrahūmkāreṇa pādaprahārābhighātena meghādikam bhasmīkṛyamāṇam cintayet / evam ghātitā bhavanti /

§57 atha vā śūnyatāsamādhim āmukhīkṛtyānantaram akāreṇa vairo10)
canībhūya tantroktavairocanarūpam niścintya hāmkāreṇāryācalam
manasā svahṛdayād niścārya

り、百八返(マントラ)を唱えた、マンダラの中央にある(本経に)説かれた橛と同じ形の橛をもって、一切の障碍を次のような順序で橛すべし。すなわち、前述の通りのマンダラの中央にある橛に引っかけた抨線によって、右まわりに、外輪の光明輪を丸く墨打ちし、その外に、鉄囲山を同じく丸く墨打ちすべし。その光明輪の中に蟻塚の土をもって天等や障碍の像を作り、本来の位置(東方)にある帝釈(天)の像に、イ字をもって黄色の帝釈(天)を(化作すべし)。同様に、火(天)等の像にラン字をもって赤色の火(天)を、アハンと言って黒色のヤマ天を、クランと言って黒色のラークシャサを、ヴァンと言って白色の水(天)を、ヤンと言って黄赤色の風(天)を、パットと言って黄色のクベーラを、スンパと言って白色の伊舎那(天)を成じて、金剛鉤等(の印言)によって、鉤召し、引入し、縛し、自在になして橛すべし。

56. 金剛吽伽羅

完全に障碍を除かんと欲する者は(これらの像を)土で覆いかくすべし。 かくの如くなしてもそれらが障碍を作すならば、金剛吽伽羅の瑜伽を作し、 タッキ王(のマントラ)によって鉤召し、金剛鉤等の(印に)よっても鉤召 等を作し、金剛吽伽羅の(印を)縛し、左足で障碍の像を踏みつけ、

◎ フーン ヴァン フーン

云々等の増益の瑜伽により、展左の姿勢を取って、彼方此方に(障碍の)雲等に向けてその印を投げるべし。虚空に広く拡散した輝やく炎で充たされた光り輝やく金剛吽伽羅が、(障碍の) 雲等を蹴撃し、灰燈にしつつあると思うべし。さすれば(障碍達は)打ち殺される(であろう)。

57. 風天

あるいはまた、空性の三摩地を現前し、すぐさまア字を(変じて)毘盧遮那と成し、(根本) タントラに説かれた毘盧遮那の姿を想い浮かべ、ハーン字より(変じた)聖不動(明王)を意にて自身の心臓より出たし、

¹⁾ Ms. °ghnāḥ 2) Ms. °sthitiyām 3) Ms. ī 4) Ms. run̂° 5) Ms. om. m 6) Ms. °bha iti iśā° 7) Ms. °bhignāka°, T.b. kyan 8) Ms. vidarbhaṇa, Tib. spel ba'i 9) Ms. °da° 10) Ms. tatrokta, Tib. rgyud las 11) Ms. °hṛyān, Tib. thugs ka nas

¹⁾ Tib, 欠

²⁾ Tib. 'dod pa'i rgyal po (rāgarāja?)

vajra hām bandha /

iti manasodīrayan bāhyamaṇḍalasya bāhyato vāyavye koņe gandhena bindusaptakaṇ kṛtvaikaikaṃ binduṃ yaṃkāreṇābhyantarīkṛtya madhye ca saptamaṃ yaṃkāraṃ binduyuktam / ete ca saptabindavaḥ saptavāyavo mṛgārāḍhāḥ kṛṣṇavarṇā āryācalena pāśenānīyā bandhyāś cintanīyāḥ / madhye caiṣām eko nāyakaḥ śeṣāḥ ṣaḍbindavaḥ taṃ parivārya samantato 'vasthitā iti / tataḥ śarāvam ākāreṇa meruṃ vicintya tasyopari mahendramaṇḍalam ākāreṇaiva sarvatra vajrasaṃcchannam / madhye ca pañcasūcikaṃ vajraṃ hūṃkārabījitam / koṇeṣu śūlāni ca vicintya / tathaiva

58 vajra hām bandha /

ity udīrayams tena śarāveņa tad yathoktam bindum saptakam pi10) 3)
thayet / tataḥ śarāvamerūpary amkāreṇa bhagava(37a)ntam pūrvo11)
ktam vairocanam vicintyāryācalam cālīḍhapādena parvatam avaṣṭabhya bhagavantaḥ purataḥ khaḍgapāśahastam vāyum tarjamānam
cintayet / evam sarvavāyubandhaḥ kṛto bhavati /

6 金剛よ ハーン 縛せ

と、意にて唱えつつ、北西の隅において、外輪の外から塗香を七滴、各々のしずくをヤン字(を唱えつつ)、内に向かってたらし、そして中央で第七番目のしずくをヤン字を(唱え、たらすべし)。また、これら七滴は鹿に乗った青黒色の七風天と(なり)、聖不動(明王)によって、索にて引き寄せられ、縛せられると思うべし。また、中央において、それらのうちの一(滴)が主尊となり、残りの六滴は彼を取り囲んで周りに住すと(思うべし)。次に、覆鉢をアー字を(唱えつつ)、須弥山と(なると)想い、その上に大因陀羅輪を同じアー字より(化作し)、いたる処が金剛杵にて覆わるると(想うべし)。また、中央には、フーン字の種字より生じた五鈷金剛杵を(想い)、(四)隅には(三)叉戟を想い、同じく、

❸ 金剛よ ハーン 縛せ

と唱えつつ、その覆鉢によって、今説いたところの七滴を覆うべし。次に、 覆鉢の須弥山の上に、アン字を(唱えつつ)、前に 説いた世尊毘盧遮那を想い、また、世尊の面前に、展左の(姿勢で)山を圧し、手に剣と索を持ち、 風天を祈克している聖不動(明王)を想うべし。かくの如くして、一切の風の縛がなされる。

58. 水天等

また、水等の障碍の除滅がある。自身をハーン字より(変じたる)風火輪に住せる聖不動(明王)と成ると(思い)、蟻塚の土か、或は、(地に) 落ちざる牛糞によって、障碍の像を作り、カン字によって剣を、ラン字より火坑を生じ、クシュミー字により鉤からなる索を成じて(それを)左手で把み、右手で剣を(取り)、索にて(障碍を)引き寄せ、障碍の像に(剣を)刺し込み、次の(真言)を唱えつつ、展左の姿勢で立ち、頭を左足で踏みつけるべし。

¹⁾ Ms., Tib. ham 2) Ms. °yam 3) Ms. om. m 4) Ms. yakā°, Tib. om. 5) Tib. a 6) Ms. °citya, Tib. bsams la 7) Ms. mā° 8) Ms. °vaḥ 9) Ms. °jrāham, Tib. ba dzra ham (P. ha) 10) Ms. °ri aṅkā, Tib. om las 11) Ms. °pa° 12) Ms. rephāgni° 13) Tib. D. kim, P. kam 14) Ms. pāśam kuśa°, Tib. źags pa daṅ / lcags kyu bskyed de 15) Ms. °ghnam

¹⁾ 不詳。「第七番目のしずくでヤン字を(描くべし)」とするか。

²⁾ Tib. ram las による。

³⁾ Tib. 「索と鉤を生じ」

namaḥ samantavajrāṇām caṇḍamahāroṣaṇa sphoṭaya hūm (1··· ···1) tram hām mām //

iti / tatpratikṛtiṃ khaḍgena vā vidārayet / viṣāktābhir vā rājikābhir pratikṛtiṃ vilipyāgninā tāpayet /

tāpitas tv agninā so hi lepitas ca na saṃsayaḥ /
api brahmāpi sakro vā kṣipraṃ dahyati tatkṣaṇam // 1 //
ity āha bhagavān vairocanaḥ //

§59 āryācalayogena cāsya mantra(37b)syāyutasevām kṛtvā paścāt karma kuryād iti /

6 om āḥ hūm /

ity anena cāryamañjuśrīyamāntakam kṛṣṇam ṣaṭcaraṇam caturmu-kham caturbhujam dakṣiṇabhujābhyām khaḍgaparaśudharam vāma-bhujābhyām pāśamusaladharam dakṣiṇābhimukham krodhagaṇair gagaṇam āpūrayamāṇam vicintya śūlamudrām baddhvā meghādini-vāraṇāya sākṣepam prayojayet / talavajrabandhe tarjanīdvayasūcī śūlamudrā /

sa ced evam api vighnopaśāntir na bhavati / āmaśarāvadvayamadhye rudhiracityangāraviṣarājikonmattakapattrarasair mantram ālikhya siddhārthakān aṣṭaśataparijaptāms tasmin śarāvasam(11······11)
puṭe nyasyānalavighnādim dṛṣṭvāhutiśatam saptakam vā juhuyāt /
13)
14)
15)
16)
tatas te naśyante mṛyante vāmanuṣyair vā gṛhyante / vajrahūmkārayogeṇa vā hūmkāram lakṣajaptam kṛtvā mānuṣāsthimayacaturangulapramāṇakīlakenāṣṭottaraśatajaptena tathaiva vajrānkuśā-

と。或はその像を剣で切り刻むべし。或は毒油によって、黒芥子によって、 2) 「塩等によって」,像を塗り火で焙るべし。

(1) 火で焙られたその(像に)、(毒等が)塗り(込められることは)疑いない。 梵天さえも、或は帝釈天でさえも、その瞬間ただちに燃え上る。

と、世尊毘盧遮那はのたまえり。

59. 不動明王

また、聖不動 (明王) と瑜伽して、そのマントラを一万回誦して、しかる後、作業をなすべし。と、

60 オーン アーハ フーン

というこの(マントラ)によって、聖文殊師利ヤマーンタカを、黒色で、六足・四面・四臂、右の二手に剣と手斧を持ち、左の二手に索と棍棒を持ち、南に面し、忿怒眷属達によって虚空界を満たしつつあるものと想い、槍の印を縛し、雲等の(障碍の)除滅のために威風を示すべし。掌を金剛縛にし、二頭指針の如くなすが搶印なり。

もし、かくの如くなすも障碍の終熄なき時は、焼かれざる二つの皿の中央に、血と灰と炭と毒と黒芥子と朝鮮朝顔の葉の汁でマントラを書き、白芥子を百八回誦して、その皿を合わせた中に入れ、火等の障碍を見て、百度び、或は七度び焼供すべし。さすればそれら(障碍は)減び、或は死し、或は鬼神達に捕われる(であろう)。或は金剛吽伽羅と瑜伽し、フーン字を十万回誦して、人骨でできた四指量の橛を百八回誦し、同じく金剛鉤等の(印言)を

¹⁾ Tib. tra ka ham mam 2) Ms. om. r 3) Ms. vrā° 4) Ms. °hyadi 5) Ms. °nām 6) Ms. aḥ 7) Ms. °ma° 8) Ms. om. m 9) Ms. °ti bhavati, Tib. ½i bar ma gyur na 10) Ms. om. °n 11) Ms. °syanaravi°, Tib. me'i bgegs 12) Ms. °ṣṭvā āhu° 13) Ms. tai 14) Ms. °ntai 15) Ms. °yate 16) Ms. vāmamanu°, Tib. mi ma yin pas

¹⁾ 常用真言では trat であるが、Tib. traka も可能かもしれない。

²⁾ Skt. 欠, Tib. lan tshwa la sogs pas による。

(38a) dibhir ākrsya pravešya baddhvā pratikrtim vajrena kilayed iti //

§60 athāgnidāhaśamanam abhidhīyate / agner upari vamkāreņa varunamandalam tasyopari padmamadhyasthitam cakram tasyopari vamkārenaiva śankhakundendudhavalam vairocanam upavistam catuhsamudracaturnadyānavataptasadrśanavavāridhārābhir āpūrayantam daśadiśaś cintayed iti /

vajranetryā vajrajvālānalārkeņa ca śarāvamerum kilakam ca samraksya vajrayaksavajrabhairavanetrābhyām tesām ākāśabandham krtvā vajrabandhena vajrapañjaram dadyāt /

abhicārahomena vā vighnanivāraņam kuryād iti //

§61 tato mandalanābhisthitakīlakam caturhūmkāreņotpāţya vaksyamānapañcavarnakaih kilakagartām prapūrva samikurvāt /

tato hrīhkārena vāmetaracaksusoś candrasūrvau nispādya krodhadrstyā parito nibhālya dvārāni kurvāt //

§62 atha rangābhisamskāro bhavati /

6 om vajracitrasamaya hūm //

(38b) ity anena mudrāyuktena sarvarangān saptavārān abhimantraved vajramaya bhavantīty āha bhagayan mahavajradharah / tatreyam mudrā /

susamdhitasamāgryam tu vajramudrādvikasya tu / kṛtvā tu sarvaraṅgāṇām diptadṛṣṭyā samāhvayet // 1 // Vajradhātumahāmandalopāyika-Sarvavajrodaya

もって鉤召し、引入し、縛して、(障碍の)像に(その橛を)金剛杵によって 打ち込むべし。

60. 火焚

次に、火焚の寂滅が説かれる。火炎の上にヴァン字より(変ぜる)水輪を, その上に蓮華の中央にある輪を、その上にヴァン字より(変ぜる)、白貝や群 多(の花)や白月の白さをした毘盧遮那が坐り、(その)十方を四海や四河 や無熱悩池の如き新鮮な水流が満たしているのを想うべし。(さすれば火焚 の寂滅があるであろう。)

(あるいは)、金剛眼の(印言)によって、また金剛火炎日光の(印言)に よって、覆鉢の須弥山と橛を守護し、金剛薬叉と金剛怖畏眼の(印言)によ って、これら(障碍)の虚空縛をなして、金剛縛にて金剛網を与うべし。 あるいは、降伏の護摩にて障碍の除滅をなすべし、と。

61. 抜橛

次に、マンダラの中心にある橛を、四度びフーン字を(唱えつつ)引き抜 き、以下に説く五種の顔料をもって橛の穴々を満たし、平らになすべし。 次に、フリーヒ字を(唱えつつ)左右の眼に月と日を成じて、忿怒見をも ってあまねく見渡し、諸門を(化)作すべし。

62. 染色印言

そこで、染色の所作がある。

⑥ オーン 金剛彩色三昧耶よ フーン (H. §856)

というこの(真言)と、印によって、すべての染料を七度び誦して(加持) すべし。(さすればそれらの染料は)金剛を体とするものとなる(であろう)

と,世尊大持金剛はのたまえり。

ここに、以下が(染色の)印である。

(1) 二手金剛印(金剛拳)になし、(二)頭指並び立てよく相往らべし。輝ける 視線にてすべての色を引き寄せるべし。(H. §986)

¹⁾ Ms. vakā°, Tib. bam 2) Tib. hi 3) Ms. °stvā. Tib. lta bas 4) Ms. om.

m 5) Ms. °ngām 6) Tib. rdo rje'i ran bźin 7) Ms. tantre°

tu 9) Tib. tshon rtsi thams cad ni, H. rangani

¹⁾ Tib. rdo rje bcins pas dra ba bya'o 「金剛縛にて切断すべし」

²⁾ Tib. mdzub mo 「頭指」

§63 hīḥkāreṇa cānte jvālayed vajrasūryakrodhasamayamudrayā vāmavajramuṣṭinā ca /

om vajracitrasamaya hūm //
ity uccārayann aiśānīm diśam ārabhya pradakṣiṇato raṅgam pātayet / tataḥ paścād yathāsukham anena krameṇa nīlam pītam raktam śyāmam śuklam iti / ṣaḍḍhaste kanīyasā parimāṇam raṅgam
rekhāyeta / param hastavṛddhyā pādavṛddhiḥ / tathā coktam Vajraśekhare /

nīlavajramayī sūcih sauvarņālambanā parā /
padmarāgamayī sūcis tathā mārakatī parā /
svetābhyantarato jūeyā eşa rangakramah smṛtah // 1 //
ity āha bhagavān mahāvajradharah //

pūrveṇa tu mahānīlaṃ (39a) dakṣiṇaṃ pītasaṃyutam / lohitaṃ paścimabhāgaṃ mañjiṣṭottarasaṃyutam // 1 // madhyato bhūmibhāgaṃ ca sphaṭikābhaṃ niruttaram / vajraghaṇṭādharo nityaṃ saṃlikhet susamāhitaḥ // 2 // vajrastaṃbhāgrasaṃstheṣu pañcamaṇḍalamaṇḍitam / 11) madhyamaṇḍalamadhye tu buddhabiṃbaṃ niveśayet // 3 // buddhasya sarvapārśveṣu maṇḍalānāṃ tu madhyataḥ / samayāgrīḥ catasro hi saṃlikhed anupūrvaśaḥ // 4 // vajravegeṇa cākramya maṇḍalānāṃ catuṣṭaye / (14··· ...14) akṣobhyādyāṃs tu caturaḥ sarvabuddhān niveśayet // 5 //

63. 染色作法

また、終りにヒーヒの字を(唱えつつ)金剛日忿怒三昧耶印をもって、また、左金剛拳になして、(すべての色を) 輝やかすべし。

◎ オーン 金剛彩色サマヤよ フーン

と唱えつつ、東北方より右繞しながら色をつけるべし。それより以後は意のままに次の順序で(色づけすべし。すなわち)、青、黄、赤、黒、白の(順)である。六肘の(壇)については、畳をより少なめに色をつけるべし。さらに、(壇の大きさが)一肘増えれば、(染料の量は)四分の一ずつ増える。同じく『金剛頂(タントラ)』に説かく、

- (1) 青金剛(石) より成る針があり、次に黄金を所縁とする(針)があり、 (次に)紅蓮華(ルビー)よりなる針があり、次にまた同様にエメラルド から成る(針)がある。(次に)白(色)の(針)は中心と知らるべし。こ れが染色の次第と伝えらる。
- と,世尊大持金剛はのたまえり。

64. 諸尊布置

- (1) 東は暗青色に、南は黄色く、西方は赤に、北は茜色に、
- (2) 中央と地の部分は無上に輝く玻璃の色に、金剛杵と鈴を持つ者は常に、 善定して描くべし。
- (3) 金剛柱の突端の処に,五(月)輪にて飾られた(内宮)があり,中央の(月)輪の真中に(毘盧遮那)仏の像を布置すべし。(H. §204®)
- (4) (毘盧遮那) 仏の一切の脇にある(四)輪の中央から,四(波羅蜜)三昧 耶最勝女達を順に描くべし。(H. §205⑨)
- (5) また,金剛歩にて(他の)四(月)輪の処に近づき,阿閦等の四仏をすべて布置すべし。(H. \$205⑩)

¹⁾ Tib. hi 2) Ms. °mn 3) Ms. °nīn 4) Ms. kaniyasī 5) rangā 6) Ms. om. h 7) Ms. °bhyā° 8) Ms. om. tu, Tib. śar phyogs su ni 9) Ms. °bho° 10) Tib. zla ba'i dkyil 'khor lnas, H. °sthendupa° 11) Ms. mancamanḍala', Tib. dkyil 'khor dbus su ni 12) Ms. °lānantu 13) Ms. °gryaś 14) Ms. °bhyāyāstu 15) Ms. °ddhām

¹⁾ 北京 No. 113, "Vajraśikharamahāguhyayogatantra", 232a8,

²⁾ op. cit., 282a8

akśobhyamaṇḍalaṃ kuryāt samaṃ vajradharādibhiḥ /

vajragarbhādibhiḥ pūrṇaṃ ratnasaṃbhavamaṇḍalam // 6 //

vajranetrādibhiḥ śuddham maṇḍalam tv amitāyuṣaḥ /

amoghasiddheh samlekhyam vajraviśvādimandalam // 7 // iti //

cakrasya koṇasaṃstheṣu vajradevih sámālikhet /

bāhyamaṇḍalakoṇeṣu buddhapūjāḥ samālikhet // 8 //

dvāramadhyeşu sarveşu dvārapālacatuşţayam /

bāhyamaṇḍalasaṃstheṣu mahāsattvān niveśayet // 9 //

tatredam vajravegahrdayam bhavati /

athāsya mudrā bhavati /

manasotksipya rekhāṃ tu vajrasūtraṃ yathāpi vā /

9) 10) (11·····11) 12)
praviśan niṣkrama(39b)n vāpi bhraśyate samayād na saḥ//10//iti//

\$65 tatra bhagavān vairocanaḥ sitavarṇaḥ siṃhāsane vajraparyaṅ-kaniṣaṇṇo bodhyagrimudrayā pañcasūcikavajradhārī sūryaprabhaḥ paṭṭaśāṭikānivasanottarīyaś caturmukho ratnamakuṭapaṭṭābhiṣekī pradhānamukhena pūrvānanaḥ /

evam akşobhyādayo 'pi gajāsaneşu vajraparyaṅkaniṣaṇṇāḥ sūr-yaprabhāmaṇḍalā vairocanābhimukhā ratnamakuṭapaṭṭābhiṣekiṇaḥ nīlapītaraktaśyāmavarṇā yathākrameṇa / ekamukhāḥ pañcasūcika16) 17) 18)
vajravajraratnapadmacakraviśvavajradharāḥ svamahāmudrābhiḥ/vajradhātv iti pañcatathāgatahṛdayam udīrayatā sthāpyā lekhyā vān19)
tarikṣāvasthitāś ca tathāvatāryaikīkāryāḥ /

- (6) 阿閦のマンダラを同じく持金剛等の(四菩薩)をもって作るべし。金剛蔵等の(四菩薩)によって宝生のマンダラを円満に(作すべし)。(H. §205@)
- (7) 金剛眼等の(四菩薩)によって,無量寿のマンダラを清浄に(作すべし)。 不空成就の金剛巧(業)等(四菩薩)のマンダラが描かるべし。(H. §205@)
- (8) (内) 輪の(四) 隅の処に、金剛天女達を描くべし。外輪の(四) 隅に仏供養女達を描くべし。(H. §206@)
- (9) 一切の門の真中に四人の門番を,外輪の処に(十六)大薩埵達を布置すべし。(H. §206@)

そこにおいて、次が金剛歩の心真言である。

⑤ オーン 金剛歩よ 近づけ フーン と。(H.§864)

また、その印がある。

(10) 画像あるいはまた、金剛抨線を意をもって持ち上げ(るならば)、入るにしても、出るにしても、彼は三昧耶を違越するにあらず。(H.§866) と。

65. 五仏

その(マンダラ)において、世尊毘庶遮那は、(身色) 白色で、金剛結跏座にて獅子座に坐し、覚勝印(智拳印)にて五鈷金剛杵を持ち、日(輪の)光(背)あり、綾絹の(内)衣と上衣を着し、四面で、宝冠と繒綵を受職し(頭頂に敷き)、主たる面は東に向けたまえり。

同様に、阿閦等の(四仏)も、象座等に金剛結跏座にて坐し、日輪の光(背)あり、毘盧遮那に面前し、宝冠と榴綵を受職し、順に青、黄、赤、黒の(身)色である。(これらの四仏は)一面であり、(順に)五鈷金剛杵・金剛宝・蓮華輪・羯磨金剛杵を持し、自らの(眷属たる)大印達を伴なえり。(瑜伽者は)『金剛界よ』と、五如来の心真言を唱えつつ、布置せられ、あるいは描かるべき、虚空に止住せられた(マングラの諸尊を)そのまま(瓊場に)下して一体化せしむべし。

¹⁾ Ms. pūrṇṇā 2) Ms. °viśvodi° 3) Ms. °vyaḥ 4) Ms. om. n 5) Ms. muttra, Tib, phyag rgya 6) Ms. rekhan 7) Ms. om. m 8) H. athāpi 9) Ms. °viṣyanti 10) Ms. °krā° 11) Tib. ñams par (D. pa), H. trasyate 12) Ms. °mā° 13) Ms. °tre 14) Ms. om. ḥ 15) Ms. °ṇṇaḥ 16) Ms. °jraḥ 17) Ms. °tnaḥ 18) Ms. cadmaḥ, Tib. rdo rje pa dma daṅ sna tshogs rdo rje 19) Ms. tathaivātā°, Tib. de bźin du phab ste (P. te)

^{1) &}quot;Vajraśikharamahāguhyayogatantra" 232b

(00

§66 evam

6 sattvavajrī /

iti sattvavajrim yāvad

හ vajrāveśa aḥ /

iti vajrāveśam / bhagavato vairocanasyāgrataḥ pañcasūcikaṃ ra3)
ktavajraṃ sattvavajrī / dakṣiṇapārśve pañcasūcikavajraśikhaṃ cintāmaṇiratnaṃ ratnavajrī / pṛṣṭhataḥ ṣoḍaśapattraṃ padmaṃ sitaraktam / aṣṭau pattrāṇy adho vikasitāni / upari cā['dab ma brgyad
gyen du bltas pa / kham bye ba'i naṅ na rdo rje rtse lha pa chud
pa'o / g-yon du ka rma ba dzri źes bya bas / rdo rje las ma sku
mdog ljaṅ gu / sna tshogs rdo rje rtse mo bcu gñis pa kha dog
lha pa'o //]

/ 'di ni rdo rje dam tshig ste // rdo rje sems dpa' yin par grags /
/ rdo rje ye śes bla med ni // de rin nid du 'bab par śog // 1 //
60 ba dzra a be(D. we) śa a //

źes bya ba lan bcu nas brgya'i bar du brjod na nes par 'bab par 'gyur ro //

de nas gal te 'bab par ma gyur na / de'i tshe khro bo'i khu

66. 四波羅蜜

かくの如く,

69 薩埵金剛女よ

と言って、薩埵金剛女を、乃至,

69 金剛遍入よ アハ

と言って、金剛遍入を(下すべし)。

世尊毘盧遮那の面前に赤色の五鈷金剛杵を(立てるは)薩埵金剛女なり。 (毘威遮那の)右脇に五鈷金剛杵を先端に持つ如意宝珠を(置くは)宝金剛 女なり。背後に十六葉の白と赤の遊華を(描くに)、八葉は下に開き、上に [八葉が見え、葉間に五鈷杵のあるものを(置くは)法金剛女なり。

左に五色の十二鈷羯磨杵を(置くは)業金剛女なり。〕(以下,十六大菩薩, 賢劫千仏名が説かれる。)

2) 67. 加持護念同真言

(次に、速やかに(金剛)阿闍梨は薩埵金剛女印を結び、彼(弟子)の心臓に置いて次の(頌)を唱うべし。

(1) これこそは金剛三昧耶なり、金剛薩埵と伝えらる。今まさに、汝に無上の金剛智を遍入せしめん。

60 金剛(智)よ 温入せよ アハ

と十乃至百度び唱うれば、必ずや遍入す。

そこでもし、遍入しないならば、その時は、忿怒拳を結び、薩埵金剛女印

^{\$67 ((}P.51b*, D.45a') de nas slob dpon gyis myur du rdo rje sems ma'i phyag rgya bcińs la / de'i sñiń gar gźag ste / 'di skad ces brjod (P.52a) du gźug go //

¹⁾ Ms. °jrīti 2) Ms. °veśeti. Tib. ba dzra ā be śa a 3) Ms. °jrām 4) Tib. adds g-yas su ra tna ba dzri źes bya bas rin chen sems ma sku mdog ser mo // 5) Ms. °ta 6) Tib. adds dha rma ba dzri źes bya bas rdo rje chos ma sku mdog dmar mo // 7) The end of the fol. 39. Fols. 40~59 are missing. 8) Tib. D. inserts daṇḍa 9) See p. (56), note 6) below 10) D. aḥ 11) D. bcu nas lan brgya'i 12) D. om. daṇḍa

¹⁾ Tib. にて補う。この部分は Skt. と Tib. とでは構文に相違がある。なお、Tib. には四波羅蜜菩薩の身色が次の如く説かれている。金波一青、宝波一黄、法波一赤、 業波一緑。

^{2) §67~75} は、Sk. p. 292, 1.8~p. 296, 1.24 に対応する文が見出せる。H. との対応はその都度記す。

³⁾ 入仏三昧耶の印

tshur beins la / rdo rje sems ma'i phyag rgyas dral bar bya źiń / 60 ba dzra satwa a a a ah //

źes bya ba 'di yań brjod la / bcom ldan 'das rdo rje sems dpa' 'od zer dmar po 'bar bas kun tu gań bar bsams la / lan brgya'i bar du bzla bar bya'o //

\$68 de lta bus kyan gal te 'bab par ma gyur na /) (tato ghaṇṭāsahi
tām vajrā) (60a) veśasamayamudrām baddhvā vāmapādena tasya da
kṣiṇapādam ākramyopary ākāśadeśe vairocanam śrīvajrasattvasyo
pari tasyaivāveśanāya kruddhahūmkāraraśmisamūhenākramyamā
nam / adhastāc ca vajravātamaṇḍalyā hūmkārenotthāpyamānam /

evam pūrvādidiksthitair akṣobhyādibhiḥ /

68 hūṃ trāḥ hriḥ ah //

tatas tvaramāņena (vajrā) cāryeņa sattvavajrimudrām baddhvedam uccārayitavyam /

ayam tat samayavajram vajrasattva iti smrtam / aveśayatu te 'dyaiva vajrajñānam anuttaram // 1 //

を引き裂き、次の(マントラ)を唱うべし。

◎ 金剛薩埵よ アハ アハ アハ アハ

と(百度び)唱うべし。尊とき金剛薩埵として、(弟子が)赤色の炎光によって満たされつつあると想うべし。

68. かくの如くにしてももし、遍入しないならば、〕その時は、鈴を持ち、金剛 遍入三昧耶印を結び、左足にてかの(弟子)の右足を踏み、上方の虚空に毘 盧遮那を(想い)、(弟子たる)吉祥金剛薩埵の上にその同じ(毘盧遮那)を 遍入せしめんがために、(毘盧遮那が)忿怒フーン字の光聚と共に歩みつつあ (1…) ると(想うべし)。また、下より、金剛風輪とフーン字によって持ち上げられ つつあると (想うべし)。かくの如く、東等の方処にいる阿閦等(の四仏)が、

6⊗ フーン トラーハ フリーヒ アハ

¹⁾ D. rgya 2) D. ā ā ā āḥ 3) D. 'bab 4) D. adds kun tu khyab pas 5) D. du

⁶⁾ Skt. reconstructed by H. §. 224, 225 and Sk. p. 292

wajrāveśa aḥ // iti 10-100 vārān uccārya niyatam āviśati // atha yady āveśo na bhavati / tataḥ krodhamuştim baddhvā sattvavajrimudrām sphoţayed idam udīrayet /

⁶⁷ vajrasattva aḥ aḥ aḥ aḥ //

iti śatavārān uccārayet / bhagavatā ca vajrasattvena raktavarņajvālāprabheṇāpūryamāṇaṃ cintayet //

^{§68} anenāpi yady äveśo na bhavati /

⁷⁾ Reconstructed by Sk. p. 292, Tib. de'i tshe rdo rje 'bebs pa'i dam tshig gi phyag rgya dril bu dan bcas pa bcins la /

⁸⁾ Ms. °kramyamyopayā° 9) Ms. °satvo syo° 10) Ms. °ddham

¹¹⁾ Ms. "mūmenā" 12) Ms. "disthi" 13) Ms. "diḥ, Sk. dibhih 14) Ms. traḥ. Tib. D. trāṃ, P. traṃ 15) Tib. D. triḥ, P. hri

¹⁾ Tib. による。あるいは「フーン字より(化作した)金剛風輪によって」と訳すことも可能であろう。

(57)

ity ebhiḥ svabījaraśmivyūhaiḥ saṃpātyamānaṃ cintayaṃs tam āveśayet /

69 vajrasattva aḥ aḥ aḥ aḥ // iti tathaivāvartayet //

\$69 atha pāpabahutvād āveśo na bhavati / punaḥ pāpasphoṭanamudrayā tasya punaḥ punaḥ pāpāni sphoṭavyāni /

samidbhir madhurair agnim prajvālya susamāhitaḥ / nirdahet sarvapāpāni tilahomena tasya tu // 1 //

🔞 om sarvapāpadahanavajrāya svāhā //

iti dakṣiṇahastatale kṛṣṇatilaiḥ pāpapratikṛtiṃ kṛtvā hūṃkārama4)
dhyaṃ vicintya tarjanyaṅguṣṭhābhyāṃ homam kuryāt //

tato homakuṇḍān nirgatya jvālāmālākulair vajrais tasya śarīre

6)
pāpaṃ dahyamānaṃ cintayen niyatam āviśati /

evam api yasyāveśo na bhavati tasyābhişekam na kuryād iti / $^{7)}$ āviṣṭasya ca pañcābhijñādiniṣpattiḥ (60b) tataḥ kṣaṇād eva bhavati //

§70 tatah samāvişţam jñātvācāryena

he vajrasattva he vajraratna he vajradharma he vajrakarma //

iti vajrasattvasamayamudrām baddhvoccāranīyam / punar

nṛtyasattva nṛtyavajra // iti //
 ¹⁰⁾
 sa ced āviṣṭaḥ śrīvajrasattvamudrāṇ badhnīyāt / tadācāryeṇa

というこれら(各)自の種子の光線の集合と共に趣入せしめられつつあると 想い、その(金剛智)を遍入せしむべし。

② 金剛薩埵よ アハ アハ アハ アハ と同様にくり返すべし。

69. 摧罪法

もし、罪が多いが故に、(金剛智の) 遍入がない時は、再び摧罪の印を(結 んで)、彼(弟子) の諸罪をくり返し摧破すべし。(cf. H. §842, §984)

- (1) 善定せる者は、マドゥラの薪木をもって火を燃やし、切麻の焼施によって彼 (弟子) の一切の罪を焼尽すべし。(cf. H. §1140)
 - オーン 一切の罪を焼尽する金剛のために スヴァーハー (H. §1144 ①)

と(唱え),右の手のひらに 黒胡麻を用いて 罪の形像を作り、真中にフーン字を想い,頭指と大指にて(摘んで)焼施をなすべし。

それより、炎の蟹に充ちた数多の金剛(杵)が、焼施の火坑より出でて、 彼(弟子)の身体の中で罪を焼きつつあるのを想うべし。(かくして)必ずや (金剛智)が逼入す。

かくの如くなしても、(金剛智の) 遍入がない者、その者には灌頂を な すべきでない。(金剛智が) 遍入した者には、 まさにその瞬間に、 五神通等が 完成す。

70. 召入金剛薩埵

そこで、(弟子に金剛智が) 遍入したのを知って、阿闍梨は

- ① オオ 金剛薩埵よ オオ 金剛宝よ オオ 金剛法よ オオ 金剛業 よ
- と、金剛薩埵の三昧耶印を結び唱えるべきである。また
- ② 舞薩埵よ 舞金剛よ
- と(唱うべし)。

もし遍入したならば、(その者は)吉祥金剛薩埵の印を結ぶべし。その時、

¹⁾ Ms. cintayet stam 2) Ms. °vyā 3) Ms. mudhurair 4) Sk. hūmkāram madhye 5) Ms. °kuled 6) Ms. pāpām 7) Ms. āveştha° 8) Ms. punaḥ 9) Ms. ādiṣṭhaḥ 10) Ms. om. m

(58)

vajramuştimudropadarśanīyā / evam sarve śrīvajrasattvādayaḥ samnidhim kalpayanti /

tato 'bhipretavastu prcched anena / jihvāyām tasyāvişṭasya vajram vicintya /

brūhi vajra //
iti vaktavyam / tatah sarvam vadati //

§71 tatas tām mālām mahāmandale kṣepayet /

@ praticcha vajra hoh /

iti tato yatra patati so 'sya sidhyati / tatas tāṃ mālāṃ tasyaiva śirasi bandhayet /

© om pratigrhna tvam imam sattva mahābala // iti //

§72 tato mukhabandham muñced anena /

76 om

vajrasattvaḥ svayaṃ te 'dya cakṣūdghāṭanatatparaḥ / udghāṭayati sarvākṣo vajracakṣur anuttaram // 1 // he vajra paśya // iti //

§73 tato mahāmaṇḍalaṃ vajrāṅkuśād ārabhya vairocanaparyantaṃ darśayet / tatas

7 tiştha vajra //

ity ādinā praveśamudrāmokṣam śiṣyahṛdaye kārayet /

— 249 —

阿闍梨は金剛拳の印を顕示すべし。〔同様に,金剛笑の印を結んで(弟子を) 遍入せしめ,その時阿闍梨は金剛法の印を顕示する(等)まで(なさるべき

である。)〕かくの如くならば、吉祥金剛薩埵等一切は面前に現われる。

それより、次の(マントラ)によって願い事を請うべし。

逼入し終った彼(弟子)の舌に、金剛杵を想い、

73 語れ 金剛よ (H.§1038④)

と言うべし。さすれば、一切を語る(ものとなるであろう)。

71. 投華得仏

次に、その華鬘を大マンダラ上に投げるべし。(H. §228)

74 金剛 (薩埵) よ 納受せよ ホーホ

と (唱え), (華鬘の) 落ちた所, その (尊) が, 彼に成就す。次いで, その 華鬘を彼 (弟子) の頭に結ぶべし。(H. \$229)

⑦ オーン (金剛) 薩埵よ 大力ある者よ 汝はこの者を摂受し給え と (言いつつ)。

72. 解覆面

次に、覆面を解くべし。次の (マントラを唱えながら)。(H. §230)

6 オーン

- (1) 金剛薩埵は自ち、今日、汝の眼を開かせんと専念し給えり。
- 一切眼者は無上の金剛眼を開かしむ。

オオ 金剛よ 見よ

と。

73. 見曼荼羅

次に、大マンダラを、金剛鉤より始めて毘盧遮那に至るまで見せるべし。 そこで

⑦ 起て 金剛よ

云々と(唱えつつ),弟子の心臓の上で、遍入の印を解くべし。

¹⁾ Ms. °nīyāḥ 2) Tib. adds de bźin du rdo rje bźad pa'i phyag rgya 'chin du bcug la / de'i tshe rdo rje chos kyi phyag rgya ñe bar bstan pa'i bar du'o // 3) Ms. sannidhyan 4) tasyāviṣṭasyāviṣṭasya

⁵⁾ Ms. satvam, H. sattvam 6) Ms. °bhyā

¹⁾ Tib. のみ。cf. Sk. p. 294, 1. 15.

tato bāhyamaṇḍalābhyantare pūrvadvārā(61a)bhimukhaṃ bāhyato vā candramaṇḍalam ālikhya / śiṣyaṃ sattvavajrādimudrācatuṣṭayena svasamayamudrayā ca śrīvajrasattvādirūpam adhiṣṭhāya / svamahāmudrayā candramaṇḍale pratiṣṭhāpyābhiṣiñcet / gandhapuṣpādibhir abhyarcyārghaṃ dattvā / chattradhvajapatākādibhis tūryaśankhanināditaiś ca //

§74 tato mangalagāthābhir abhinandya / ādau tāvad udakābhişekena makuṭapaṭṭavajrādhipatināmābhiṣekaiś cābhiṣincya / punaḥ puṣpādibhir lāsyādyaṣṭavidhapūjayā ca saṃpūjya / śiṣyeṇa cottamāṃ
dakṣiṇāṃ dattvācāryaṃ praṇamya praṇamya valitavajrānjalinā puṣpādikābhiṣekāś ca grāhyāḥ /

ācāryābhişekam tu śrīvajrasattvamahāmudrayā pratiṣṭhāpya yathānirdiṣṭeṣu sthāneṣu / samayamudrābhis tasya kāye śrīvajrasattvādim nyasya śrīvajrasattvapratimām ca śirasi pratiṣṭhāpyoda-kābhiṣekam dattvemam mantram aṣṭottaraśatavāram āvartayet / 10) 11) 0m mahāsukha vajrasattva jaḥ hūm vam hoḥ suratas tvam // iti //

tataḥ sarvavidhim anuṣṭhāya śiṣyanāmāṣṭaśatena saṃstutya gāthāpañcakenānujñāṃ dattvā / udgāthāvyā(61b)karaṇena sarvaśiṣ15)
yān vyākuryād iti // //

74. 七種灌頂

次に、(阿闍梨は)吉慶の讃頌によって喜ばせ、まず最初に(i)水灌頂によって、〔次に、(ii) 印灌頂〕、(iii) 宝冠、(iv) 緒綵、(v) 金剛、(vi) 主、(vii) 名灌頂によって灌頂し、再び、花等によって、また嬉等の八種の供養によって供養し、弟子は、最上の贈物を阿闍梨に捧げ、金剛合掌を向けて何度も頂礼し、また花等の灌頂を取得すべきである。(阿闍梨は)、吉祥金剛薩埵の大印をもって、阿闍梨灌頂(の用意を)所定の諸処に設置させ、諸々の三昧耶印によって彼(弟子)の身体に吉祥金剛薩埵を布置し、また吉祥金剛薩埵の形像を(弟子の)頭上に立たしめ、水灌頂を授け、次のマントラを百八度び繰り返すべし。

78 オーン 大安楽なるものよ 金剛薩埵よ ジャハ フーン ヴァン 20 ホーホ 汝は妙滴なり

と。

次に,(残りの)一切の銭軌を遂行し,弟子の名前を百八度び讃じて,五 3) 種の讃頌によって許可を授け,称讃と授記によって一切の弟子を記別すべし。

次に、(阿闍梨は) 外輪の内側において、或は外側で、東門に面前せる月輪を描いて、弟子を、薩埵金剛等の四印をもって、また本尊の三昧耶印をもって吉祥金剛薩埵等の身を取るものと加持し、本尊の大印をもって月輪(の上)に立たしめ、灌頂すべし。澄香や花等によって称讃し、閼伽水を授け、傘蓋や幢や幡等によって、また音楽や法螺貝の吹奏によって(称讃すべし)。

¹⁾ Ms. °mukhīm 2) Ms. om. m 3) Ms. °śankhā° 4) Tib. adds phyag rgya'i dban bskur ba, Sk. mudrābhiṣekeṇa 5) Ms. °pūjāyā 6) Ms. °pūjyaye

⁷⁾ Ms. °dikam mabhisekās 8) Ms. °yah 9) Ms. vārā° 10) Ms. ā jah

¹¹⁾ Ms. om. s 12) Ms. udgātā°, Tib. gzens bstod 13) Ms. °raņaina

¹⁴⁾ Ms. om. n

¹⁾ Tib. による。

²⁾ 大栗不空三昧耶真実密語(理趣経十七段総院) 普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌(大正蔵 No.1124, 20卷, p.535a) 金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌(大正蔵 No.1125, 20卷, p.537b)

³⁾ 写本欠落部分に説かれている(Tib. P. 16 b 3~7)。

§75 [1] atha guhyābhişeko bhavati / ācāryābhişekā(rham) x x x x x x (sarva)karma ca śiksayet / iyatā guhyābhişekenābhişikto bhavati //

iti samksiptakramah //

§76 (2) atha madhyakrama ucyate /

mūlamandalād dhastadvayamātram parityajya praveśadvārasammukham garbhamandalardhapramanam caturasram paścimadvaram pañcabhiś cūrṇair maṇdalam ālikhya tasya / madhye 'stapattram padmam / tasyopari raktavarnam raśmimālinam pañcasūcikam vajram ālikhet / tataḥ puṣpādibhis tam mandalam sampūjya candramandalapatācchannam simhāsanam pīthikām vā vairayakṣābhijaptām pūrvavac chişyam vajrasattvam adhisthāya tatra pratisthāpya vajrasattvamahāmudrayā / simhāsanopari vitānam / daksinabhāge ca patasragdāmabhūsitam sitaratnacūdacchatram hūmkārābhimantritam / vāmato nānāvastravicitradhvajapatākāś ca gaganaganjaparijaptāh samsthāpyārgham dattvā puspādibhih sampūjya / śańkhapaţahabherīkāhalādibhir vādyair vādyamudrādhiṣṭhitair vādyanrtyagītair vajra(62a) lāsyādibhiś cottamām daksiņām ādāya / śrīvajrasattvapratimām tasya mūrdhni pratisthāpya mangalagāthā uccārayet // //

75. 秘密灌頂

[1] 略次第

そこで、秘密灌頂がある。阿闍梨灌頂に〔ふさわしい者を入らしめて、マ ンダラと一切諸尊の一切の真実と阿闍梨の一切の〕所作とを教示すべし。そ れだけで、(この者は)秘密灌頂によって灌頂せられた者となる。

以上は略摂の次第である。

76. [2] 中次第

そこで中程度の次第が説かれる。

根本マンダラより二肘ほど小さくなして、(根本マンダラの)入り口(東門) に面しており、内輪の半分の量で、四角で、西門を有するマンダラを、五種 の色粉で描いて、 その中央に、 八葉の蓮華を (描き)、 その上に赤色の光鬘 を持つ五鈷金剛杵を描くべし。次に、花等によってそのマンダラを供養し、 月輪(を描いた) 帛布で覆われた獅子座, 或は金剛薬叉の(マントラにて) 誦 した椅子に、以前の如く、(阿闍梨は)弟子を金剛薩埵なりと加持して、そこ に、金剛薩埵の大印をもって坐らしめ、獅子座の上方に襲りを、右方に帛布 と花の帯にて飾られた白い宝鬘のついた傘蓋をフーン字にて加持し、左には、 雑衣と美しい幢と幡を虚空庫の(マントラ)にて呪して置き,(弟子に)関伽 水を与え、花等や〔嬉等〕によって供養し、法螺貝、小太鼓、鼓、大太鼓等 の、楽器の印にて加持した楽器によって、また、音楽や舞や歌や金剛嬉等に よって最上の贈物を与え、吉祥金剛薩埵の形像を彼(弟子)の頭上に置いて, 吉慶の讃頌を唱うべし。

¹⁾ Ms. damaged, Tib. slob dpon du dban bskur bar 'os pa bcug la / dkyil 'khor dan / lha thams cad kyi de kho na nid thams cad dan / slob dpon gyi (D. gyis) las thams cad slob par bya ste / 2) Ms. °tīti // sam° 3) Ms. °dvayamantram 4) Ma. °ikam 5) Ms. om. m 6) Ms. pūrņņavasthişyam 7) Ms. paţā° 8) Tib. adds sgeg mo la sogs pa (D.pas) 9) Ms. ca utta°

¹⁾ Tib. sgeg mo la sogs pa による。

§77 lakşmidharah käncanaparvatābhas trilokanāthas trimalaprahīnah buddho vibuddhāmbujapattranetras tan mangalam bhavatu śāntikaram tavādya // 1 // tenopadistah pravaras tv akampyah khyātas triloke naradevapūjyah / dharmottamah śāntikarah prajānām loke dvitiyam śubhamangalam tat // 2 // saddharmayuktalı śrutimangaladhyalı samgho nrdevāsuradaksinīvah / hrīśrīnivāsah pravaro gaņānām loke tṛtīyam subhamangalam tat // 3 // yan mangalam tuşitadevavimanagarbhad āsīd ihāvatarato jagato hitāva / sendraih surair anugatasya tathagatasya tan mangalam bhavatu śantikaram tavadya // 4 // yan mangalam kisalayajyalapuspanaddhe ramye ca lumbinivane bahudevajusthe / nāthasya janmani babhūva bhavāntakasya tan mangalam bhavatu śantikaram tavadya // 5 // gron khyer ser skye'i gnas rgyal po'i pho bran du / lhums nas bltams pa ston pa bde gśegs zas gtsan sras /

77. 吉慶讚

(1) 化

御仏は、吉祥ありて、金山の如く輝き、三世の主にして、三垢を滅ぼし、 満開の蓮華にも喻らべき眼をもてり。その寂静なす吉慶が今日汝にあれか

(2) 法

彼にて示されし(法)は、最勝にして不動なり、三界に名高く、人天に 供養され、最勝の法にして、人々の寂静をなす。これぞ世間における第二 の浄らかなる吉慶なり。

(3) 僧

正法を具足し、聴聞の慶びに富みし僧伽は、人・天・阿修羅の供養する ところなり。慚愧と吉祥の住み家にして、集会の中の最勝なり。これぞ世 間における第三の浄らかなる吉慶なり。

(4) 降兜率

世間の利益のために、 帝釈天と共なる神々を随えて、 兜率天宮の胎より、 この世に降りし如来の吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあれかし。

(5) 出胎

新芽輝やく花に飾られ、多くの諧天が楽しめる、喜びあふるるルンビニ 園において、(三)有を滅ぼせる主の誕生時に、吉慶ありき。その寂静なす 吉慶が今日汝にあれかし。

(6) 灌浴

カピラヴァストの王都にて、胎より出で給いし時、諸天によって、速や

¹⁾ Ms. om. tā 2) Tib. bkra śis des ni skye dgu źi byed dan po'o 3) Ms. om. h 4) Ms. om. m 5) Ms. subham 6) Ms. tam 7) Tib. no tshe ses dan dpal gyi gźi (=hrīśriguṇāḍhyaḥ) 8) Ms. °maṇḍalaṃ 9) Ms. sai° 10) Ms. kiśalayo° 11) Ms. damaged, Tib. srid pa mthar phyin pa yi bkra śis gan byun pa'i 12) P. ba'i

¹⁾ Tib. によれば「この吉慶が人々を寂静になすべし」(bkra sis des ni skye dgu rnams la źi byed śog) となる (以下の傷においても同じ)。

myur bskrun bdud rtsi'i chus gtor pa yi bkra śis gan / かなる
bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 6 // 寂静た

(yan mangalam puravare kapilahvaye ca

devair mahātmabhir abhisţutavanditasya /

āsīd acintyakuśalasya tathāgatasya

tan maṅgalaṃ bhavatu śāntikaraṃ tavādya // 7 //

(62b) yan mangalam vividhaduhkhavināśanāya

tustyā tapovanam abhivrajato 'rdharātre /

āsīt suraiḥ parivṛtasya namaskṛtasya

tan maṅgalaṃ bhavatu śāntikaraṃ tavādya // 8 //)

yan mangalam sakalasattvahitaya bodhau

saddharmaratnaniratasya muner babhūva /

sarvārthasiddhişu viśālaparākramasya

tan mangalam bhavatu śāntikaram tavādya // 9 //

yan mangalam jvalitakāncanavigrahasya

vaidūryavarņatrņasamstaramadhyagasya /

paryankabaddhanibidottamaniścalasya

tan maṅgalaṃ bhavatu śāntikaraṃ tavādya // 10 // chu bo'i 'gram na rtswa ṣa'i phreṅ gis yoṅs bskor ba / śin tu rmad du byun ba'i srid pa sel mdzad pa /

かなる生長のために、甘露の水を注がれし、浄飯の子の吉慶ありき。その 寂静なす吉慶が今日汝にあれかし。

(7) 入宮

カピラと称する都城にて、偉大な諸天に讃歎恭敬せられたる。不可思議 の善巧もてる如来の吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあれかし。

(8) 出家

種々なる苦を減せんがため、夜半に、勇躍して苦行林に歩みたる、諸天 に囲まれ頂礼されたる御方の吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあ れかし。

(9) 苦行

あらゆる有情の利益のために、菩提についての正法という宝を求め、一 切義の成就に向って優れて勇猛である牟尼の吉慶ありき。その寂静なす吉 慶が今日汝にあれかし。

(10) 禅定

輝ける金山にも似た身体もて、瑠璃の(如き青き)色の草座の上に、結 跏趺坐にてゆるぎなく最勝にして不動なる御方の吉慶ありき。その寂静な す吉慶が今日汝にあれかし。

(11) 菩提道場

龍王にてかしづかれ、河岸において、チャーシャ鳥の群に囲まれし、稀

¹⁾ P.rtsi 2) Ms. om. k. 6. Skt. reconstructed by Takahashi, 「吉慶梵讀について」p. 90, yan maṅgalaṃ kapilavastuni rājadhānyāṃ garbhād viniḥṣrtavataḥ snapitasya devaiḥ / śauddhodaner amṛtavāribhir āśuvṛddhyai tan maṅgalaṃ bhavatu śāntikaraṃ tavādya // 3) Ms. yan maṅgalaṃ vividhiduḥkhavināśaya tuṣṭyā tapova kapilāhvaye ca devair mahātmabhiṣṭutam acyutā [damaged] gatasya tan maṅgalaṃ bhavatu śāntikaraṃ tavādya // yan maṅgalaṃ sakala°. Skt. of kk. 7 and 8 reconstructed by Takahashi, op. cit., p. 86, 87.

⁴⁾ Ms. babhūya 5) Ms. "saptara" 6) Ms. "nivito"

¹⁾ Tib. は第四番目の偈とするも、この位置の方が適切であろう。

klu yi rgyal pos phyag byas pa yi bkra sis gan / bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 11 // yan mangalam bhagayato drumarajamule maitrībalena vijite bahumārapakse / nānāprakāram abhavad bhuvi cāmbare ca tan mangalam bhavatu śāntikaram tavādya // 12 // sdug bsňal mtha' dag gźig phyir rdo rje'i gdan bźugs te / nam gyi tho rans bdud bźi po dag rnams btul ba / ston pa bde bar gśegs pa'i bkra śis gan vin pa / bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 13 // van mangalam pravadato varadharmacakre vārānasīsthitavatah sugatasya śāstuh / atyadbhutam sphutam abhūd bhuvi cāmbare ca / tan mangalam bhavatu śantikaram tavadya // 14 // yan mangalam hitakaram paramam pavitram punyakriyāka (63a) ranam āryajanābhijustam / kṛtsnam jagāda bhagavān muniśākyasimhas tan mangalam bhavatu śantikaram tavadya // 15 // iti // mu stegs byed pa kun gyi na rgyal gźom pa dan / 'gro la bde ba skyed phyir cho 'phrul 'dam pa dag /

有なる寂静のために(三)有を除きたる御方の吉慶あり、その寂静なす吉 慶が今日汝にあれかし。

(12) 降魔

菩提樹のもと, 慈力によりて, 多くの魔軍の打ち破られし時, 天と地に 尊とき方の種々様々な吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあれかし。

(13) 成道

あらゆる過患を滅せんがため、夜明けにおいて、四魔に打ち勝ち、金剛 座にて住せる御方の最勝なる吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあ れかし。

(14) 初転法輪

ヴィーラーナシーに住し、勝れた法輪を宣説し給える善逝・教師の、天 と地における非常に希有にして広大なる吉慶ありき。その寂静なす吉慶が 今日汝にあれかし。

05 転法輪

利益なす、最勝にして浄らかな、聖衆に好まれし福徳の行為をなす吉慶 **を、尊とき牟尼釈師子はことごとく説きたまえり。その寂静なす吉慶が今** 日汝にあれかし。

と。

(16) 現大神通

あらゆる外道の行為を打ち破り、人々に安楽を生ぜんがため、最勝なる

¹⁾ P. phogs 2) Ms. om. k. 11. Skt. reconstructed by Takahashi, op. cit. p.173 ~172: yan mangalam bhujagarājanamaskrtasya nadyās tate parivrtasya hi cāşapanktyā / śäntyartham adbhutam abhūd bhavasūdanasya tan mangalam bhavatu śantikaram tavadya // 3) Ms. om. d 4) P. rje 5) Ms. om. k. 13. Skt. reconstructed by Takahashi, op. cit., p.170; yan mangalam sakaladosavināśahetor vajrāsane sthitavatah pravaram babhūva / māram vijitya caturo 'pi niśāvasāne tan mangalam bhavatu śāntikaram tavādya // 6) Ms. adbhudbhutam 7) Ms. °bhud 8) Ms.puñya 9) D. gźom par byed pa

¹⁾ Skt. "pravadato" は "pravartino" が妥当かと思われるが、それでは韻律が不 斉合となる。Tib. もまた "bstan pa" である。

ne bar ston pa'i rgyal po'i bkra śis gan yin pa /
bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 16 //
'gro la phan phyir mtho ris gnas ni 'dir gśegs te /

(5....5)
tshans pa la sogs lha tshogs lag na rna yab gdugs /
sna tshogs thogs pas yons su bskor ba'i bkra śis gan /
bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 17 //
de bźin gśegs pa źi ba'i mchog tu ner gśegs pa /
man da ra yi me tog man pos mnon mchod pa /

8)
lha mchog rnams kyis mnon par bstod pa'i bkra śis gan /
bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 18 //
lha dban klu dan mi yi dban pos phyag byas la /
mkha' ldin gnod sbyin dri za'i dban pos mchod gyur pa /
de bźin gśegs pa stobs bcu ldan pa'i bkra śis gan /
bkra śis des ni skye dgu rnams la źi byed śog // 19 //

§78 nāmāṣṭaśatena ca saṃstutyādau pūrṇakumbhair vajrāṅkuśādihṛdayāny udīrayaṃs tatas tatkalaśaiḥ paścād vijayakalaśād vajramuṣṭinodakam ādāyābhiṣekaṃ pānaṃ ca dattvā kalaśena cābhiṣiñced udakābhiṣekataḥ / tatrāyaṃ prayogaḥ /

ityādi pūrvavad āvartayet / śeṣaṃ pūrvavad evam // madhyakramo 'yam //

神変を示現し給える勝者の吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあれ かし。

07) 宝階三道下洲

人々を利益せんがため、兜率天よりこの世に降り、手に払子や傘蓋など 種々なるものを持てる梵天等に囲まれし御方の吉慶ありき。その寂静なす 吉慶が今日汝にあれかし。

(18) 入涅槃

最勝なる涅槃に近づき給える。**多**くのマンダーラ華にて供養され、最勝 天等に讃歎された如来の吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日汝にあれか し。

(19) 帝釈・龍(王)・人主とにかしづかれ、ガルダ・ヤクシャ・ガンダルヴァ に供養せられたる十力持てる如来の吉慶ありき。その寂静なす吉慶が今日 汝にあれかし。

78. 瓶灌頂

また、百八(名讃)によって称讃し、最初に(水)瓶を満たし、金剛鉤等の心真言を唱えつつ、次に、これらの(五)瓶を(満たし)、しかる後、最勝の瓶より、金剛拳をもって水を取って、灌頂と(蓄)水を授け、また、(別の)瓶によって水灌頂より灌頂すべし。そこにおいて暗誦さるべき真言は次の通りである。

① (オーン) 金剛鉤よ オーン 金剛(薩埵)よ 灌頂し給え

乃至

オーン 金剛薩埵よ フーン オーン 金剛(薩娷)よ 灌頂し給え 2) オーン 大安楽なるものよ

云々と,以前の如く繰り返すべし。あとは前の如し。 以上が中程度の次第である。

¹⁾ D. pa 2) D. ba'i 3) Ms. om. k. 16. Skt. reconstructed by Takahashi, op. cit., p.169~168: yan mangalam kṣapanakādyakutīrthyasamgham jitvā babhūva sugatasya janopakāre / rddhyām asamkhyamunirūpanidarśayasya tan mangalam bhavatu śāntikaram tavādya // 4) D. nas 5) P. om. 6) D. ba 7) D. dā 8) D. tshogs 9) D. pa 10) Ms. om. kk. 17~19 11) Ms. taka° 12) Ms. °laśā 13) Ms. °yām 14) Ms. °ñceti, Tib. om ba dzra sa twa a bhi ṣi ñtsa źes bya ba'i bar dań

¹⁾ Tib. により補う。

²⁾ 四仏灌頂にあたるか。

§79 (3) atha vistarābhişekakramo bhavati / athaiva sarvam kṛtvā lāsyādyaṣṭavidhapūjayā ca saṃpūjayet / tato ratnaśalākām sauvarņaśalākām vādāya purataḥ sthitvā sphuṭavāg evam vadet / ajñānapaṭalaṃ vatsa apanītaṃ jinais tava / salākīvaidyarājais tu yathā lokasya taimiram // 1 // athāsya hṛdayam / (5---- 6) 7) 5) \$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$0}\$}\$}\$ oṃ vajranetrāpahara paṭalaṃ hrīḥ // iti //

\$80 tato darpaṇam ādāya dharmalakṣaṇaṃ kathayet /

pratibimbasamā dharmā acchāḥ śuddhā hy anāvi[laḥ /

agrāhyānabhilāpyāś ca hetuka]rmasamudbhavāḥ // 1 //

evaṃ jñātvā (63b) tu vai dharmān niḥsvabhāvān anālayān /

kuru sarvārtham atulaṃ jāto 'sy urasi tāyinām // 2 //

iti //

(13...
[de nas dril bu blans la dkrol te /]

(ākāśalakṣaṇaṃ) sarvam ākāśaś cāpy alakṣaṇam /

ākāśasamatāyogāt sarvāgrasamatā sphuṭā // 3 //

iti //

ghaṇṭāṃ dadyāt / aḥ ghaṇṭā [sbyin pa'i sñiñ po yin no /]

79. [3] 広灌頂次第

そこで、詳細な灌頂の次第がある。

洗浄眼

さて、まさに一切の (所作) をなして、嬉等の八種の供養によって供養すべし。次に、宝石でできた箆か、或は金でできた箆を (手に) 収って、(弟子の) 前に在りて、はっきりした言葉でかくの如く言うべし。

- (1) 仏子よ、諸仏によって汝の無智の翳膜は除かれた。箆を持てる医王達によって世間の眼翳が(除かれる)如くに。〔金籌偈〕 そこで次の心真言がある。
- ⊗ オーン 金剛限よ 翳膜を除去せよ フリーヒ
 と。

80. 令弟子対鏡

次に、鏡を取り上げて、諸法の性相を説くべし。

- (1) 諸法は鏡像の如くであり、浄らかで澄んでおり濁りがない。また所取でなく不言説なり。因と業より生じるものなり。
- (2) かくの如く諸法は無自性にして、無所依なるものと知り、比類なき一切の利益を作せ、(さすれば)、汝は救度者達の胸に生ぜん。(汝は仏の真子なり。)[明鏡の偈]

[そこで、(金剛) 鈴を取って告ぐるに、]

(3) 一切(諸法)は、虚空の相なり、しかも又、虚空は無相なり。虚空と平等なりとの瑜伽により、一切は勝れて平等なること明了なり。

と言って鈴を授けるべし。『アハ』というのが鈴を授ける時の心真言である。

¹⁾ Ms. sampūjyayet 2) Ms. vaccha 3) Ms. śālākī° 4) Ms. caipurā, Tib. lin tog 5) Tib. om. om, and ne tra a ba ha ra ba ta la. 6) Ms. vajrā° 7) Ms. paṭaliṃ 8) Ms. dharmaṇala° 9) Ms. bimbi° 10) Ms. om. h 11) Ms. damaged. Skt. reconstructed by Sp., Tib. dag cin gsal la rñog pa med // gzun du med cin brjod du med // rgyu dan las las kun tu (D. du) 'byun // 12) Ms. °rmābhih sva° 13) Ms. damaged 14) Ms. damaged, Skt. reconstructed by Sp., Tib. chos rnams nam mkha'i mtshan nid de // nam mkha' la yan mtshan nid med // 15) Ms. °śa cā° 16) Ms. sphuṭoti 17) Tib. a źes bya 18) Ms. damaged

(tataḥ) sarvatathāgatārāgayasveti caturdiksu catvārah śarāh kṣeptavyāḥ / ekenordhvam ākāraṇīyam adhastāc ca hor iti // punar darpanam ādāya evam vadet /

darpaṇavad vajrasattvas te 'cchah śuddho hy anāvilah / hṛdaye tiṣṭhate vatsa sarvabuddhādhipah svayam // 4 // iti //

vaktavyam ca yo 'yam sarvatathāgatādhipatir bodhicitto 'yam ity avagaccha /

athāsya darpanagrahane mantrah /

ā vajrasattva // iti //

\$81 tato dharmacakram pādayor madhye saṃsthāpya śaṃkhaṃ ca daksinahaste dattvaivam vadet /

adyaprabhṛti sahacittotpādamātrena dharmacakram pravartayet /

āpūrya samantād vai dharmasankham anuttaram // 1 // na te kānksavimatir vā nirviśankena cetasā /

prakāśaya sadā loke mantracaryānayam vidhim // 2 //

evam krtajňo buddhanam u (64a) pakariti giyase /

te ca vajradharāḥ sarve rakṣanti tava sarvataḥ // 3 //

iti //

次に、『一切如来よ 歓喜せしめ給え』と言って、四方に四本の矢を 射る : べし。また上と下に一本づつ、『ホーホ』と言って散ずべし。 再び鏡を取って、以下の如く言うべし。

(4) 仏子よ、鏡の如く浄らかで澄んでおり、濁りなき金剛薩埵・一切諸仏の 主が、自ら汝の心臓に住し給う。

また、(ここで) 言わるべきことは、『この一切如来の主とは菩提心そのも のである』と知るべし。

また,かの(弟子に)鏡を受け取らせる時のマントラは,

◎ アー 金剛薩埵よ

である。

81. 授与商佉

次に、法輪を両足の間に置かせ、右手に法螺貝を与えて、かくの如く言う べし。

- (1) 今日より以後、発心するやいなや法輪を転ぜよ。あまねく無上の法螺を 吹いて。
- (2) 疑心暗鬼になるなかれ。無畏なる心をもって、常に、世間に対して、最 勝なる真言行の理趣を開示せよ。
- (3) かくの如く諸仏の恩を知れる汝は報恩者と称えられる。また、かの一切 の持金剛者達が、あまねく汝の守護をなす。[法輪法螺偈] と(言って),

¹⁾ Ms. damaged. Tib. de nas 2) Ms. om. r 3) Ms. ekenairddham 4) Ms. om. c 5) Ms. vamsa 6) Ms. vajrā°, Tib. "a" for "ā" 7) Ms. datvevam 8) Ms. om. t 9) °ntāvu 10) Ms. dharma cakram 11) Ms. mantrācayā° 12) Ms. krjne 13) Ms. bhiyase

¹⁾ Tib. chos kyi dun, Sp. dharmaśankham に従う。

²⁾ Skt. には vidhim とあり「真言行の理趣である儀軌を」と訳せるが Tib. mchog, Sp. param によって上記の如く翻訳をしておく。

vajracakrabhāṣau dharmākṣarasahitau prayoktavyau /

sarvasattvahitārthāya sarvalokeşu sarvataḥ /
yathāvinayato viśvaṃ dharmacakraṃ pravartatām // 4 //
sarvasattvahitārthāya sarvalokeşu sarvataḥ /
yathāvinayato viśvaṃ vajracakraṃ pravartatām // 5 //
evaṃ krodhapadmamaṇicakraṃ pravartatām iti gāthāpañcakenānujñām dadyād iti //

\$82 tataḥ svodgāthayā sarvaṃ sarvabuddhātmabhāvakaṃ vajranāmābhiṣekais tu vyākuryād vai tathāgatam /

iti //

tatreyam udgāthā tathāgatamuşṭidvayaṃ baddhvā vāmacīvara
14)

karṃikadhāraṇābhinayo dakṣiṇena varadānā[bhinaya iti /

tataś caivaṃ) śisyebhyo vaktavyam /

yasyānayodgāthayā mahāmudrayā paramarahasyavidhāne vyākaraṇaṃ kṛyate / tasya vajrasattvādayaḥ sarvata(thāgatāḥ sarva法の文字をそなえたる金剛輸(法輪)と(金剛)語(法螺)とを用うべし。 さらに、

- (4) 一切有情の利益のために、一切世間の人々に対して、あまねく、秩序正しく種々なる法輪を転ずべし。
- (5) 一切有情の利益のために、一切世間の人々に対して、あまねく、秩序正しく種々なる金剛輪を転ずべし。

同様に、「忿怒輪、遊華輪、摩尼輪を転すべし。」という五(部の) 偈によって許可を与うべし。

82. 授記·安慰

次に本**尊**の称讃をもって、一切諸仏を自体とするすべての者を、金剛名灌 頂等によって、如来なりと授記すべし。

② オーン まさに吾れは汝を授記す。金剛薩埵・如来は有の悪趣より抜け出して、究竟の有を成就すべし。オー 金剛某甲なる如来よ、成就せよ。汝は三昧耶なり。地よ 空よ 天よ

٤.

そこにおいて、これが称讃である。二手如来拳を結び、左手にて衣角を持つ仕種をなし、右手にて施願の仕種をなす、と。

また次に、かくの如く弟子達に言うべし。

『ある者に,この称讃によって,大印をもって,最勝なる秘密の儀則において授記がなされるが,その者に対し. 金剛薩埵を始めとする,一切の

¹⁾ Ms. *tavyo 2) Ms. pravarttyatām 3) Ms. śvogamtayā, Tib.P. thams cad gzens bstod nas /, D. dnos po thams cad kyi ran gi no bo'i bdag nid can gyi gzens bstod nas / 4) Ms. sarvām 5) Ms. *kah 6) Ms. vajrā* 7) Ms. *gatām 8) Ms. *titoddhṛtya atya* 9) Ms. om. m 10) Ms. thāga si* 11) Ms. bhū 12) Ms. bhruvah 13) Ms. *dgatā, Tib. gzens bstod pa 14) Ms. *kā* 15) Ms. damaged. Tib. mchog sbyin pa'i tshul du bya'o // de nas slob ma rnams la 'di skad ces 16) Ms. *dgatayā 17) Ms. damaged. see p. (78), note 1) below

¹⁾ Tib. 'khor lo 「輪」、或は「羯磨杵」か。

vajradharabo)dhisattvaparṣanmaṇḍalāḥ (64b) raṅ gi dam tshig gi slob dpon daṅ / mgrin gcig tu bla na med pa yaṅ dag par rdzog pa'i byaṅ chub tu luṅ ston par mdzad do / de ltar gzeṅs bstod pa daṅ / phyag rgya chen po'i mchog tu gsaṅ ba'i dam pa'i dhos grub byin gyis brlabs pa daṅ / shags kyi stobs yin no / źes bya bar bya'o / dbugs dbyuṅ ba lhag ma ni / dPal mchog daṅ po las śes par bya'o //

\$83 de nas thams cad la dkyil 'khor gyi gsan ba'i ye ses thams cad bslab pa nid du bya ste /
(virāgasadr) sam pāpam asattvāsti tridhātuke /
tasmāt kāmavirāgatvam na kāryam bhavatā punah // 1 //

8 mahāsamaya hana phaṭ //
itī[maṃ mahāsamayamantraṃ] coccārayet /

tato mantram dattvā svadevatācaturmudrājnānam śikṣayet //
anena vidhinā [vakta]vyam /

na kasya cit tvayānyasyāsām mudrāṇām akovidasyaikatarāpi mudrā darśayitavyā / tat kasya hetoḥ / tathā hi (te sattvā) adṛṣṭamahāmaṇḍalāḥ sattvamudrābandham prayojayanti tadā teṣām na tathā siddhir bhaviṣyati / tatas te vicikitsāprāptavi-śamāparihāreṇa śīghram eva kālam kṛtvāvīcau mahānarake pateyuḥ / tvayā pāpagamanam syāt //

iti //

持金剛と菩薩の衆輪を伴なえる一切の如来達は、自の三昧耶の阿闍梨として、一声に無上なる現等覚を授記し給えり。 かくして、(その者には) 称 讃と大印の最勝秘密の勝れた成就の加持とマントラの力とがある。』と言わるべきである。

他の安慰は『吉祥勝初(タントラ)』に(説かれている)と知るべし。

83. 教授秘密一切智

次に、すべての(弟子達)に対しマンダラの秘密の一切智を教授すべし。

- (1) 離貪ほど(重い)罪は三界に(他に)存在せず。それ故、汝は、これ以上、愛欲を遠離することをなすべきでない。(H. §608)
- ※ 大なる三味耶(誓願)を持つ者よ 殺せ パットというこの大三昧耶のマントラを唱うべし。

次に、(本尊の)マントラを授けた(後)、本尊の四印智を教授すべじ。 『汝は、いかなる者に対してもこれらの印を知らざる他の者に対し、一印たりとも示すべからず。それは何の故かとならば、実に、これら大マンダラを見ざる有情達が、(たとえ)、薩埵印の縛を結んだとしても、彼らには(汝と)同様の成就はないであろう。それゆえ、彼らは疑いをいだき、邪悪を捨て切れないが故に、すぐさま死して、無間大地獄に落ちるであろう。このため、汝も悪趣に行くであろう。』と、この儀軌によって説くべし。

¹⁾ Ms. sarvata[damaged]dhisatvaparṣamaṇdalāḥ (the end of fol. 64a), Tib. rdo rje'dzin pa thams cad daṅ byaṅ chub sems dpa'i dkyil (D. om) 'khor gyi dkyil 'khor daṅ bcas pa'i de bźin gśegs pa thams cad 2) The 1st and 2nd lines of the fol. 64b are illegible 3) D. ba 4) D. brlab 5) D. dad par 6) P. om. la 7) Ms. illegible. Tib. 'dod chags bral ba lta bu yi 8) Ms. iti [damaged] cāraye, Tib. ces bya ba'i dam tshig chen po'i sṅags 'di yaṅ brjod par bya'o // 9) Ms. om. ṃ 10) Ms. illegible. Tib. źes brjod par bya'o 11) Ms. °syaiṣā 12) Ms. °damya eka° 13) Ms. illegible. Tib. sems can de rnams kyis 14) Ms. tavayā

¹⁾ 北京 No.120 "śriparamādymahātantrakalpakhaṇḍa", 239b~240a, 大正蔵 No.244,8巻『仏説最上根本大楽金剛不空三昧大教王経』,p.415b~c,Sp.,p.358~362. 酒井紫朗『ジェバ発見密教要文の一説に就いて』『密教文化』8。

²⁾ 離盦は**声**聞緑覚の菩提分であり、如来とは菩提に心を生ずる者で、悪趣に生じ、一切の罪を尽して、再び菩提の支分を持つ者となれ、と の 意である。 Śākyamitra 著 "Kosalāṅkāra", 北京 No.3326, 211b¹ ff.参照。

³⁾ Tib. sdig med de による。

⁴⁾ Tib. de nas ran gi lha'i snags byin la / phyag rgya bźi yi ye śes bslab par bya'o // による。

⁵⁾ Tib. rgyu des による。

(81)

§84 tato lāsyādyaṣṭavidhapūjayā puṣpādibhiś ca sarvatathāgatān sampūjya / sarve yathāśaktyā pūjayan(65a)tv iti / sarvatathāgatān vijnāpya yathecchayā dhūpādibhiś ca pūjām kārayitvā yathāpraviṣṭān yathāvibhavataḥ sarvarasāhārādibhiḥ sarvopakaraṇair mahāmaṇḍalaniryātitaiḥ samtarpyedam siddhivajravratam dadyāt / idam tad [sarvabuddhatvam] ityādi //

tataḥ sarveṣāṃ punar api na kasya cid vaktavyam iti / śapa
9)
thahrdayam ākhyevam //

§85 tataḥ praviṣṭān saṃpreṣya punar nāmāṣṭaśatena saṃstutya lāsyādibhiḥ saṃpūjya praṇamyārghaṃ dattvābhipretasiddhaye kuśalaṃ pariṇamya mudrāmokṣaṃ kṛtvā sattvavajrīṃ baddhvā trivārān saptavārān vā maṇḍalaṃ pradakṣiṇīkṛtya pūrvavad visarjanādikam kṛtvā /

akāro mukham ityādinā maṇḍalaṃ vikopayet / nirmālyādikam udake prakṣepayati //

tatas caturhūmkāreņa sarvakīlān utpāţya /

次に、嬉等の八種の供養によって、また、花等によって、一切の如来達を供養して、『(弟子等) 一切は能う限り供養せよ』と言って、一切の如来達に(弟子達を)紹介して、(弟子の)望みのままに、焼香等によって供養をなさしめて、(マンダラ)に遍入した(弟子)達を、収入に応じて、一切の飲物や食べ物等によって、(また)、大マンダラに施与された一切の資具によって満足させ、この成就金剛の誓戒を授くるべし。『これこそは(一切諸仏の体性なり)』云々と。

85. 撥遺等

次に、(マンダラに) 遍入した(弟子) 達を下がらせて、再び百八名讃によって称讃し、嬉等によって供養し、頂礼して、閼伽水を施こし、所願の成就のために善(根)を回向し、解印をなし、薩埵金剛女(印)を結び、三度び或は七度びマンダラを右繞し、以前の如く挠遣等をなし、

『ア字は(一切諸法の)門なり』云々という(マントラを唱え), マンダラを壊すべし。残余のもの等を水に投げ入れしむ。

がに、四つのフーン字を(唱えつつ)、一切の橛を引き抜いて、

^{84.} 供養・金剛禁戒

¹⁾ Ms. yāsyādya° 2) Ms. °śakyā 3) Ms. om. m 4) Ms. om. n 5) Ms. °karanc 6) Ms. °dale 7) Ms. om. t 8) Ms. om., Tib. sans rgyas thams cad de 9) Ms. °thā° 10) Ms. °namyapya 11) Ms. maṇḍalamudrām, Tib. dkyil 'khor phyags la 12) Ms. °kṣepyati

¹⁾ Tib. slob ma rnams la de bźin gśegs pa thams cad la ci nus par mchod cig (「弟子遠よ, 一切の如来達をできるだけ供養せよ」)によれば, "sarvam…pūjayata" も可能であるが, ここでは "sarve" を一切の弟子達と解しておく。H. §314 の注記®を見よ。

²⁾ H. §315 の注記①を見よ。

³⁾ 成就金剛=五鈷金剛杵=菩提心。

⁴⁾ 金剛禁戒の偈 H. §315

⁵⁾ 決定要誓真言 H. §316

⁶⁾ 降三世明王真言 北京 H. §656, No. 3352 "Vajrodayapindārtha", 257b¹

(83)

Om ruru sphuru jvala tiştha siddhalocane sarvārthasādhane
 (2...
svā[hā //

ity aşṭaśatajaptena) kṣīreṇa sarvakīlakān prakṛtim ca snāpayed gartāmś cāpūrayet //

§86 praveśadvārābhimukham sarvakarmikakuṇḍam kṛtvātmaśiṣyabhūpāla (daṅ sems can thams cad la dmigs te źi ba'i sbyin sreg bya'o] //

tataḥ pradhāna(65b)śiṣyaṃ vāmapārśvena sthāpya yathāvat

(7... ...7) (8...
ghṛtāhutiśataṃ vajrasattvamantreṇa juhuyāt / tato buddhalo(canā...8) (9...
mantreṇa aṣṭaśatāhūtiṃ kuryāt) / (de nas phyag rgya de ñid
10) ...9) 11) 12)
bcins la źo dań) miśrālpatilānām āhutiśatam //

tato vajrayakşajaptavāriņā mūrdhni paryukşya vāmapāņau tenaiva rakşyāsūtrakaṃ badhnīyāt / [tatas tasya hṛdaye haste]na 15) spṛśan saptavārān parijapet //

anyeşām atra yathoktasaptasaptāhutīn juhuyāt / tataḥ paryukṣaṇaṃ rakṣāsūtraṃ ca hṛdayālabhanaṃ ca kuryād iti //

タ オーン ルル きらめけ 燃えよ 立て 眼を成就 (開眼) せる女よ一切の利益を成就せしむる女よ スヴァーハー

という(真言で)百八度び誦したミルクによって,一切の橛と形像を洗うべし。そして,(橛を引き抜いた後の)坑を(そのミルクで)満たすべし。

86. 護摩

逼入の門(東門)に面して、一切を成就する火坑を作り、自身と弟子と地神と一切衆生を想って息災の護摩をなすべし。と。

次に、最勝の弟子(正受者)を左の脇に坐らせて、如実に、蘇油の焼施を百 窓び、金剛薩埵のマントラを(唱えつつ)注ぐべし。

次に、仏眼のマントラを(唱えつつ)、百八度び焼施すべし。次に、(仏眼の) 印を結んで、酪を混ぜた小量の胡麻の焼施を百度び(なすべし)。

次に、金剛薬叉の(呪を)誦した水をもって、(弟子の) 頭頂 に 弾洒し、 3) 左の手にその〔呪を誦しつつ〕守護線 (臂釧) を結ぶべし。

次に、か(の弟子)の心臓に手で触れつつ、[仏眼のマントラを] 七度び誦すべし。

そこにおいて、他の(弟子達)に対しては、(上に)説いたように、四十九 度びの焼施を捧ぐべし。そして、弾洒や守護線や心臓に触れること(等)を なすべし。と。

¹⁾ Ms. °sādhani 2) Ms. damaged, Tib. swā hā / źes brgya rtsa brgyad bzlas pa'i 3) Ms. °pāla(damaged)yād iti // 4) Ms. padhāna 5) Ms. śiṣyāṃ 6) Ms. °śveva 7) Ms. maṇḍalajupātan 8) Ms. damaged, Tib. sañs rgyas spyan gyis brgya rtsa brgyad bya'o / 9) Ms. damaged 10) D. adds mar dañ 11) Ms. miśrāṇyati° 12) Ms. °hutī° 13) Ms. °japte vā° 14) Ms. damaged. Tib. de nas de'i sñin gar (D.khar) lag pas 15) Ms. °śaṃ 16) Ms. anyeṣātra 17) Ms. om. sa 18) Ms. °bhataṃ

¹⁾ 仏眼大咒 cf. 一切秘密最上名義大教王儀軌卷下 (大正 18卷,541 b) [仏眼菩薩大明] 蘇悉地羯囉経卷上 (別本 1) (大正蔵 18卷,634 b) [仏母真書] 薬師瑠璃光如人消災除難念誦儀軌 (大正蔵 19卷,21 c) [仏眼根本真書] 一字仏頂輪王経卷第一 (大正蔵 19卷,227 a) [諸仏仏眼明咒] 五仏頂三味陀羅尼経卷第一 (大正蔵 19卷,265 a) [諸仏五眼咒] 大聖妙吉祥菩薩説除災教令法輸(大正蔵 19卷,344 c) [仏眼菩薩真書]

²⁾ Tib. brgya rtsa brgyad 「百八度」

³⁾ Tib. de ñid bzla pa (D. pa'i) による。

⁴⁾ Tib. spyan gyi snags による。

⁵⁾ Tib. lan brgya 「百度」

(85)

vajrasattvādisasattvasarvasiddhipradāvikam / Sarvavajrodayam krtvā yan mayopacitam śubham // 1 // Ānandagarbhavidyāgraḥ sarvasattvaikabāndhavaḥ / aśesas tena lokas tu mahāvajradharo vibhuh // 2 //

Śrimadāryasarvalathāgatatattvasamgrahād Mahāyānābhisamayād Mahātantrarājād uddhṛto Vajradhātumahāmandalopāyikasarvavajrodayo nāma samāptah //

kṛteyam mahāvajrācāryĀnandagarbhapādair iti // vilikhya punyam yat prāptam mayā sādhanasamskṛtim / aśesas tena loko 'yam bhūyāc chrīvairasambhayah //

(66a) aśeşasakalasarvasattvaparamanirvānapratisthitārthena Ratnākareņa likhitam iti // // samvat acūte //

- (1) 金剛薩埵を始めとする勇者(達)の一切の成就を授与する『一切金剛出 現』を作成し、私によって福業が積集された。
- (2) その(福業に)よって、慶喜蔵を智慧者の最高と仰ぎ、一切有情の随一 の友とするすべての世間の者は、偉大なる持金剛主と(なれかし)。

『吉祥にして聖なる一切如来真実摂大乗現証大タントラ王』より略出せる。 『金剛界大マンダラ方便一切金剛出現』と名づくるもの、終り。

本(書)は、大金剛阿闍梨慶喜蔵猊下によって作られたものである。 『吾れは成就法の優品を書写し、功徳を得た。 その (功徳) によって、 すべ ての世間の者は吉祥なる金剛より生じるものとなれかし。』

すべて残りなき一切有情が最勝の涅槃に安住することを願うラトナーカラに よって書写された。

サンヴァット 179 年 (A.D.1059)

^{87.} 結頌

¹⁾ Ms. °kām 2) Ms. °vajropamām. Tib. rdo rje thams cad 'byun 4) Ms. lokās 5) Ms. °tā 6) Ms. °paikā° 7) Ms. °dakā mayotpacitaśu 8) Ms. om. m